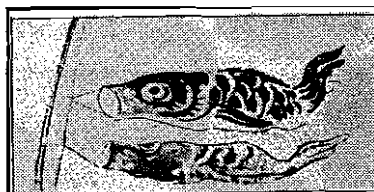
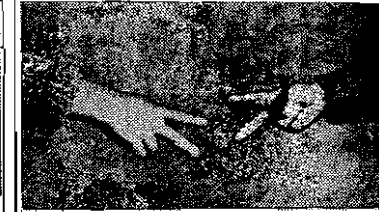


コトバノオケイコ



コ	コ	コ	ハ	ハ	ハ
イ	イ	イ	ト	ト	ト



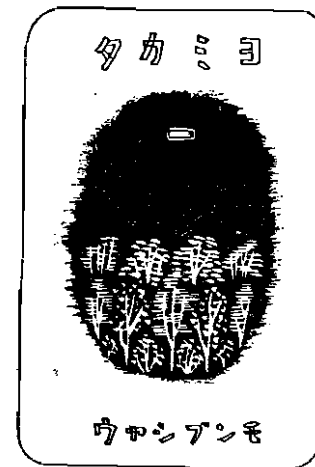
ア	ア	ア	ア	ア	ア
サ	サ	サ	カ	カ	カ
ヒ	ヒ	ヒ	イ	イ	イ

第一号 第二号 第三号 第四号 第五号 第六号 第七号 第八号 第九号 第十号

発行所 東京 書籍株式会社

定価 全巻九圓

文 部 省



凡 例

- 一、本書は文部省著作、昭和十六年より昭和十八年までの間に発行された版本によった。
- 一、本書の「コトバノオケイコ」「ヨミカタ」は全巻を凸版とし、原本の四頁分を本書の一頁におさめた。
- 一、さし絵は「コトバノオケイコ」一、「ヨミカタ」「よみかた」では色刷となつてゐるが本書ではすべて黒で印刷した。色刷は口絵参照。
- 一、本書では原本の文字を二段組とした。原本にある各巻の目次の頁数は省略した。原本のさし絵はすべて縮小して本文の近いところに入れた。
- 一、文字、表記法、巻末抽出文字はすべて原本のままとした。字体はなるべく本文に近い活字を用いた。

コトバノオケイコニ

モクロク

一	山ノ上	十四	冬
二	アシクハウンドウクワイ	十五	正月
三	ウサキトカノ	十六	春
四	ラジノコトバ	十七	夏
五	西ハタヤケ	十八	秋
六	カマキリナヤン	十九	冬
七	サルトカニ	二十	春
八	オチキ	二十一	夏
九	イモヤキ	二十二	秋
十	コモリウタ	二十三	冬
十一	オイシサマ	二十四	春
十二	デンシヤゴツコ	二十五	夏
十三	クンチヤン	二十六	秋

リマス。
「ホウハ海ガ見エマスカ。マダシハ海ガ見タイナア。」
「ヒロイ、ヒロイ海デス。青イ、青イ海デス。」
「海ノ上ニナニガアリマシタカ。」
「シラホガ、ニツニツウカンデキマシタ。」
「ドンナモノデスカ。」
「ホカケブネノシロイホデス。トホイトコロデスカ。」
「ラ、フネハ見エマセンガ、シロイホダケガ、青イ海ニ、ウカンデキルヤウニ見エマス。」
「キレイデセウネ。」

一 山ノ上

(一) 「ムカフノ山ニ、ノボッテミタイトオモヒマセンカ。」
「ノボッテミタイトオモヒマス。アノ山ノムカフニハ、ナニガアルデセウネ。」
「ワタシハ、キノフアノ山ニノボリマシタ。」
「アノ山ノムカフニハ、村ガアツテ、タンボガツツイテキマス。」
「ソレダケデスカ。」
「タンボガズットツツイテキテ、ソノサキニ海ガア。」

(二)

タ	ン	ボ	ツ	ク	村	タ	ツ	青
イ	、	青	イ	海	タ	タ	、	小
ラ	ホ	ガ	ウ	イ	テ	キ	タ	ト
方	ヒ	ウ	イ	テ	キ	タ	、	ホ
								ク
								ノ

(三)

「ムカフノ山
ムカフカラサルカ来マシタ
オニノタイシヤウニムカヒマシタ
モモトラウヲムカヘマシタ

ニ アシタハウンドウクワイ

ア	シ	タ	ハ	ウ	ン	ド	ウ	ク	ワ	イ
ス	、	勇	サ	ン	ハ	キ	、	シ	ン	、
見	マ	シ	タ	、	木	ノ	枝	ニ	、	テ
ル	バ	ウ	ズ	、	カ	ツ	、	シ	マ	ニ
ケ	イ	ヤ	ノ	店	カ	ツ	、	シ	マ	ニ
コ	エ	マ	ス	、	ラ	、	シ	マ	ニ	、
					ラ	マ	ニ	、	シ	マ
					ジ	シ	、	テ	ル	空
					オ	タ	、	ル	空	イ
					ガ	、	キ	ト	テ	、
					キ	ト	テ	、	、	、

(二) シンバイデタマリマセン。

(一) ニ アシタハウンドウクワイ

(三) ビシヨヌレ。 イヒツカッテ。
アナタハ、ウンドウクワイデナニヲシマシタカ。

(二) 三 ウサギトカメ

ウ	サ	ギ	サ	ン	、	ヒ	ル	ネ	ヲ	シ	テ	キ
ル	ゾ	、	イ	マ	ノ	ウ	チ	ニ	、	急	ゲ	、
急	ゲ	、	マ	イ	タ	、	カ	メ	サ	ン	ハ	コ
マ	デ	来	ナ	イ	タ	、	ラ	ウ	、	コ	コ	コ

(二) サウタネ
サウトモカキラナイヨ

カケツコガシヨウカ
出カケヨウカナ

正	シ	イ	コ	ト	バ	ガ	、	キ	レ	イ	ナ	コ
ト	バ	ガ	、	日	本	中	ニ	キ	コ	エ	マ	ス
セ	カ	イ	中	ニ	ヒ	ビ	キ	マ	ス	、		

(二) ワタクシクチハ、日本ノコトバハハナシマス。
日本ノコトバハ、ウツクシイコトバデス。
ワタクシクチハ、デキルダケヨイコトバヲツカヒマ。

セウ。
サウスルト、日本ノコトバハモットモットウツク。
シイコトバニナリマス。
イマ、マンシウデモ、シナデモ、セカイ中ノドコノクニデモ、日本ノコトバハハナス人ガ、タクサンキマス。

五 西ハタヤケ

西	ハ	タ	ヤ	ケ	赤	イ	ク	モ	、	東	ハ	マ
ル	イ	オ	月	サ	マ	、	カ	ウ	リ	ヤ	ン	カ

もくろく

一	春	十四	一寸ぼふし
二	らくかさん	十五	つゆ
三	國引き	十六	金魚
四	二重橋	十七	花火
五	鯉のぼり	十八	お祭
六	牛わか丸	十九	きりぎりす
七	ささ舟	二十	海
八	蛙	二十一	子馬
九	軍かん	二十二	うさぎと たぬき
十	お話	二十三	自動車
十一	むしば	二十四	長い道
十二	ねずみの ちゑ	二十五	日曜日の朝
十三	川	二十六	うらしま太郎

(二) 二年生に なつて うれしい でせう。 どんな
とが うれしいか、話して ごらんなさい。
春に なつて うれしいでせう。 どんな
うれしいか、話して ごらんなさい。

今	お	あ	花	す	さ	春
日	出	ま	の	み	く	だ
は	に	茶	お	れ	ら	春
あ	な	の	や	、	、	だ
な	っ	中	ね	た	さ	と
た	た	か	が	ん	く	、
の	か	ら	美	ぼ	ら	小
花	、	ひ	し	ぼ	だ	鳥
ま	お	っ	い	、	、	が
つ	し	こ	。	れ	野	う
り	や	り		ん	山	た
。	か	と		げ	は	ふ
	さ	、		草	花	。
	ま			、	だ	

(三) 小鳥が うたふ
「君が代」を うたひます

小鳥が　ゐます
小鳥が　なくて　ゐます
お立ちに　なつて　いらつしやる
いま　はるえさんが　來て　いらつしやいます

たのしさう
うれしさう
です

(四) 小さな ひしゃくで お茶 くんで、
かけて あげましょ、おしゃかさま。

二
らくかさん

(二)「さあ、野原へ行ってとばさう。」

「おもりがかるいのだね。」

「こんどは、ぼくのをとばすよ。」

「これは重すぎる。」

「何をさがしていらっしやるの。」

「らくかさんに つける 石を、さがして ゐるの

です。

「ぢや、これは どう でせう。」

「これなら、ちゃうどいいかもしれない。」

「うまい、うまい。」

「I see, sir」

「やあ、らくかさんぶたいだ。すすめ、すすめ。」

「わんわん。」

「ぐんよう犬も とつげき です。」

$$(\Rightarrow)$$

を	南					し	同	ま	開	い	野
北	風	い	「	の	「	た	じ	し	か	っ	原
の	が	で	ガ	」	何	°	や	た	な	ば	へ
方	吹	せ	ラ	」	を		う	°	い	い	行
へ	い	う	ス		さ		に		で	な	っ
と	て	」	玉		が		空		、	げ	て
ば	来		な		し		へ		そ	ま	空
し	て		ら		て		向		の	し	へ
て	、		、		い		か		ま	た	向
行	ら		ち		ら		っ		ま	°	か
き	く		や		っ		て		落		っ
ま	か		う		し		な		ち		て
し	さ		ど		ゃ		げ		て		力
た	ん		い		る		ま		来		

(三) 野原 え 行つて とばさう。

同じように空へなげました。

勇さんが、い
いました。

何をさがして
ゐ
らっしゃるの。

らくかさんにつける石を、さがして
いるの

[illegible]

夕やけ 小やけで 日がくれて、
山の お寺の かねが なる。
おてて つないで みな かへらう。
からすと いっしょに かへりませう。

みんなが かへった あとからは、
まるい 大きな お月さま、
小鳥が ゆめを 見る ころは、
空には きらきら 金の星。

二十五 日曜日の朝

ごきげんよう、さやうなら。
とはうに くれました。

(一)

か	す	今	つ	あ	こ
め	っ	日	れ	る	と
を	て	は	し	日	を
だ	や	、	ま	思	を
き	り	お	せ	ひ	を
起	ま	禮	う	出	を
し	す	に	。	し	を
て	。	り		ま	を
、		ゆ		は	を
せ		う		、	を
な		ぐ		父	を
か		う		や	を
を		へ		母	を
さ		お		の	を

あ	や	ら	よ	ち	い
ひ	さ	ま	む	た	り
も	き	け	う	れ	ぬ
せ	ゆ	ふ	ゐ	そ	る
す	め	こ	の	つ	を
ん	み	え	お	ね	わ
	し	て	く	な	か
					と

を	戦	さ	ご	き	枯	宮	さ	い	今
か	地	ん	み	れ	れ	城	ん	日	日
き	の	は	箱	い	か	の	と	で	は
ま	兵	、	を	に	か	方	國	す	日
し	た	お	な	取	っ	を	旗	朝	曜
た	い	喜	ほ	り	た	拜	を	早	日
。	さ	び	し	ま	か	み	立	く	で
	ん	に	ま	し	き	ま	て	起	、
	に	な	し	た	ね	し	ま	大	せ
	、	り	た	。	の	た	し	き	う
	ゐ	ま	。		朝	。	た	て	、
	も	し	お		顔		。	に	ほ
	ん	た	か		を			い	う
	文	。	あ					た	た

「ヨイコドモ」の「兵タイサン」をよくよんで、
 じぶんで おもん文を かいて ごらんなさい。

大せうほうたい日に　した　ことを　かいて　ごらん
なさい。

二十六　　ちらしま太郎

ていねいにおじぎをしました。
先生をおつれました。

これを さしあげませう。
では、おいとま いたします。

ことばの おけいこ 四

もくろく

一	富士山	十四	いうびん
二	早鳥	十五	にいさんの入營
三	海軍の にいさん	十六	雪の 日
四	乗合自動車	十七	白兎
五	菊の花	十八	たこあげ
六	かけっこ	十九	豆まき
七	かぐやひめ	二十	金しくんしゃう
八	たぬきの 腹つづみ	二十一	病院の兵たいさん
九	金の牛	二十二	支那の子ども
十	滿洲の 冬	二十三	おひな様
十一	鏡	二十四	北風と南風
十二	神だな	二十五	羽衣
十三	新年		

一 富士山

ど	こ	から	見	て	も	、	い	つ	見	て	も	、
富	士	の	お	山	は	美	し	い	。			
太	平	洋	の	波	が	立	つ	。				
日	本	一	の	こ	の	山	を	、				
世	界	の	人	が	あ	ふ	ぎ	見	る	。		

(二)

あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、
かみなりさまを下に聞く、
富士は日本一の山。

青空高くそびえ立ち、
からだに雪のきものきて、
かすみのすそを遠く引く、
富士は日本一の山。

二 早鳥

(一)

「どうも困ったものだ。」
「お米が半分もできない。」

(二)

午	後	に	な	る	と	、	東	が	は	の	何	十	と
い	ふ	村	々	が	、	日	か	げ	に	な	り	ま	す
「	ど	う	も	困	っ	た	も	の	だ	。」	お	米	が

「なんとかならないものかなあ。」
「しかたがない。この木を切ることにしよう。」
「こんな大きな木を、切っていいものでせうか。」
「でも、この木は、切るよりほかにみちがあるまい。」
「くりぬいて、舟を作るがよい。」
「えいや、えいや。」
「なんと、いふ早い舟だらう。」
「ふしぎだ、ふしぎだ。」
「いや、ふしぎでも何でも。あの勢のよいくすの木で、作った舟だ、勢のよいのがあたりまへさ。考へてみれば、このすばらしい舟になるために、あの木は、ぐんぐんのびたのかも。しれない。鳥のやうに早い舟だから、早鳥といふ名をつけよう。」

(一)

「よくかへって来ましたね。」
「ほんたうにしばらくでしたね。まあ、一つお
「かいをそろへて
考へてみれば
三 海軍のいさん
「どうするかと いふことに なりました
せんどうたちも 見て みる 人も いひました
「この 木を 切る ことに しよう
早鳥と いふ 名を つけよう

(二)

半	分	も	で	き	な	い	。」						
大	勢	の	大	工	を	集	め	て	、	舟	を	作	り
ま	し	た	。										
「	鳥	の	や	う	に	早	い	舟	だ	か	ら	、	早
鳥	と	い	ふ	名	を	つ	け	よ	う	。」			
米	や	、	麥	や	、	豆	を	つ	ん	で	、	都	の
方	へ	た	び	た	び	通	ひ	ま	し	た	。		

(二)

お	か	あ	さん	は	、	頭	か	ら	手	ぬ	ぐ	ひ
を	取	り	な	が	ら	、	よ	く	か	へ	っ	て
ま	し	た	ね	。」	と	お	っ	し	や	い	ま	し
に	い	さん	は	、	色	が	黒	く	な	っ	て	強
さ	う	に	見	え	ま	し	た	。				
ば	う	し	に	金	で	書	い	て	あ	る	字	を
み	ま	し	た	。」	大	日	本	帝	國	海	軍	。
「	加	賀	な	ど	は	、	動	く	ひ	か	ら	う
う	の	や	う	な	も	の	で	す	よ	。」		

「勇、大きく なったね。 いい 子に なった。」
「ほくも 大きく なったら、海軍 だよ、にいさん。」
「それは いい。 大ちゃんぶ になれるよ。」
「かはいらしい 水兵さん だぞ。」
「大日本、その 次は 何と 讀むの、にいさん。」
「大日本帝國。」
「あ、わかった、大日本帝國海軍。」
「さう だ、よく 讀めたね。」
「軍かんと いても、加賀などは、動く ひから
ぢやうのやうな ものですよ。」
「ほう、ほう。」

三

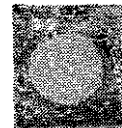
雪ヤ コンコ、
アラレヤ コンコ、
竹ノハ ニツモレ、
松ノ木 ニツモレ、
ドンドン ツモレ、
妹ハ ウタヒナガラ、前カケヲ ヒロゲテ、フツ
テ 來ル 雪ヲ ウケテ キマス。



雪ハ、アトカラ アトカ、
ラフツテ 來マス。
ナカヨク ナランデ、フツ
テ 來ルノモ アリマス。
オツカケツコヲ シナガ
ラ、フツテ 來ルノモ ア
リマス。 トンボガヘリ
ヲ シナガラ、フツテ 來ルノモ アリマス。

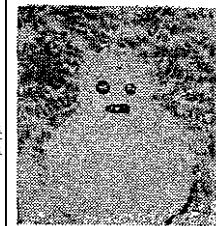
三

ニイサント 二人デ、雪ダルマヲ ツクリマシ
タ。
ハジメニ、雪ノタマヲ コシラヘテ、ソレヲニ
人デ コロガシマシタ。 スルト、ダンダン 太
キク ナツテ、コロガス コトガ デキナク ナ
リマシタ。 コンドハ、少シ 小サイノヲ コシ
ラヘテ、大キイノニ カサネマシタ。 ソレカラ、



炭デ、目ト ロヲ ツケマシタ。
ヨルニ ナツテ、私ハ ニイサンニ、
「雪ダルマヲ 見テ 來マセウ」。

ト イツデ 二人デ
外ヘ 出マシタ。
月ガ 光ツテ キマシタ。
雪ダルマハ、ドツカリ
スワツテ キマシタ。



十五 お正月

お正月 來い、山から 來い。
山の うらじろ 持ッて 來い。



十六 兵タイゴツコ

勇サンハ、オモチャノ テツパウヲ 持ッテ、
「ボクハ 兵タイゴツコ」
ト イヒマシタ。



お正月 來い、里から 來い。
おもち つきつき とんで 來い。
お正月 來い、海から 來い。
たからのお舟にのって 來い。



正男サンハ、竹馬ニノツテ、
「ボクハ キ兵タイゴ」
ト イヒマシタ。
太郎サンハ、竹ノツツヲ 持ッテ、



開くには開きましたが、すぐに落ちて 来ました。

「これは 重すぎる。」

と、正男さんが いひました。

二人は、よささうな 石を あちこちと さがしました。そこへ、春枝さんが、犬をつれて あそびに 来ました。

「何を さがして いらつしやるの。」

「らくかさんに つける 石を、さがして あるの です。」

と、勇さんが いひました。

「ちや、これは どう でせう。」

と、いって、春枝さんは ガラス玉を 二つ 見せました。

「これなら、ちやうど いいかも しれない。」

それを おもりに つけかへてから、勇さんが あげて みました。すると、らくかさんは ぱっと 開いて、ふはりふはりと 落ちて 来ました。

「うまい、うまい。」

こんどは、二人で いっしょに あげました。

「一、二の、三。」で、たかく あげると、どちらも ぱっと 開きました。

ちやうど その時、南の方から 風が 吹いて 来て、らくかさんが 吹きあげられました。さうして、どんだん

北の方へ とばされて 行

きました。勇さんも 正男さんも、その あとを おって 行きました。

「やあ、らくかさんぶたい だ。すすめ、すすめ。」



と、てんでに 大きな こゑで いふと、犬も わんわんと ぼえて、まっさきに 走って 行きました。

「ぐんよう犬も とつげき です。」

と、いって、春枝さんも ついて 行きました。

らくかさんは、草の中へ しづかに 落ちました。

三 國引き

大昔のこと です。

神さまが、國を 廣くしたいと お考へに なりました。

神さまは、海の上をお見わたしになりました。東の方の とほい、とほい ところに、あまった 土地のあるのが 見えました。

神さまは、その 土地に 太い つなを かけて、あつたけの 力を出して、お引きに なりました。

「こつちへ 来い、えんやらや。」

こつちへ 来い、えんやらや。」

かけごゑ 勇ましく お引きに なりました。その 土地が 動きだして、

大きな 舟のやうに、ぐんぐんと こつちへ やって 来ました。

神さまは、その 土地を つぎあはして、國を 廣く なさいました。

神さまは、また 海の上をお見わたしに なりました。

こんどは、西の方の とほい、とほい ところに、あまった 土地のあるのが 見えました。

「こつちへ 来い、えんやらや。」

こつちへ 来い、えんやらや。」

神さまは、それに つなを かけて、

「こつちへ 来い、えんやらや。」

こつちへ 来い、えんやらや。」

と、力いっぱい お引きに なりました。これも 大きな



舟のやうに 動いて、こつちへ やって 来ました。神さまは、かうして 國を 廣く なさったと いふことです。

四 二重橋

目の 前に をがむ 二重橋、けだかい、美しい 二重橋。

おほりの 水は しづかに 明かるく、

白い やぐらは くつきりと そびえ、

しげった 松の 間に、

おやねが かがりうしく 見えます。

さくさくと 小じやりを ふんで、

女學校の せいとさんが 来ました。

きちんと 並んで、さいけいれいをして、

こゑを そろへて 「君が代」を 歌ひました。

私たちも、いっしょに 歌ひました。

五 鯉のぼり

ゆうべの 雨が はれて、日が 氣持よく てって

富士山

白い あふぎを さかさまに
かけた 下から 雲が わき、
すそ 引く はての 松原に、
太平洋の 波が 立つ。

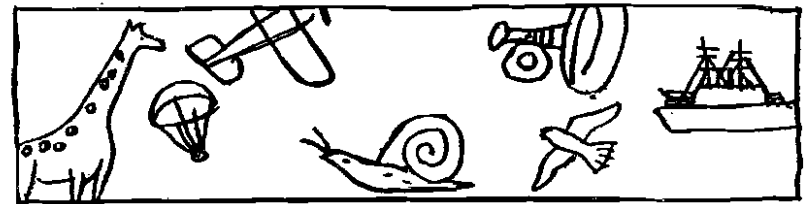


日本一のこの山を、
世界の人があふぎ見る。

二
早
鳥

昔、あるところに、一本のくすの木が生えました。たいへんな勢で、ひるも夜も、ぐんぐんとのびていきました。

よみかた 四



二二二二二二十十十十十十十十十九八七六五四三二一
十十十十
五四三二一九八七六五四三二一

もくろく

海軍の にいさん
乗合自動車
菊の花
かけっこ
かぐやひめ
たぬきの 腹つづみ
金の牛
滿洲の 冬
鏡
神だな
新竿
いうびん
にいさんの 入營
雪の 日
白兔
たこあげ
豆まき
金しくんしゃう
病院の兵たいさん
支那の子ども
おひな様
北風と南風
羽衣



何年かたつうちに、このくすの木は、今まで見たことも聞いたこともないほど、大きな木になりました。

とうとう その てっぺんは、空の 雲に とどくやうになりました。大きな 枝は 四方に ひろがって、どこから どこまで つづいて あるのか、わからないほどに なりました。

毎朝 日が 出ると、この 木の 西がは は、何十と
いふ 村々が、日かげに なります。午後には、何十と
東がはの 何十と いふ 村々が、日かげに なります。

「どうも困ったものだ。」

「お米が 半分も できない。」

「なんとかならないものかなあ。」

あちらの村でも
こちら
の村でも、かう
いって、

この大木を見あげました。

ある ちよの ある おぢいさんが いひました。

「しかたがない。この木を切ることにしよう。」

みんなは
びっくりして、

「こんな大きな木を、切っていいものでせう」

$$\perp^{\circ}$$

といひますと、おぢいさんは、

「でも、この木は、切るよりほかにみちがあるま

げで、金の牛は、おなかが すいて 困ると いふことは ありませんでした。
ところで、ある日の こと、金の牛は、ふと こんなことを 考へました。
「ここから 見るだけでも、おなかが いっぱいになるのだから、あの 島の 草を ほんたうに たべたら、どんなに おいしい だらう。」
金の牛は、もう、じつとして ありなくなりまし

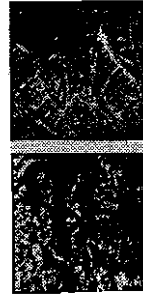
た。
いきなり 海を めがけて、どふんと とびこみました。金の牛は、自分の からだが 金で あった ことを、すっかり 忘れて ゐたの です。そのまま 海に 沈んで しまひました。

十 満洲の 冬

寒さの ために、まだガラス 一めん、まっ白に 凍ったのは きれいな もの です。この 氷の もやうは、どれ 一つとして 同じ ものが ありません。

人が かいても、こんなに きれいな かけない でしょう。

白い 菊の 花が、

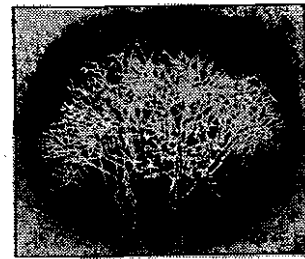


咲きそろうたやうなもの あります。
白くじゃくが、羽を いっぱいに ひろげたやうなもの あります。

星が 並んで、光って いるやうなもの あります。
子どもたちは、この 氷の 上に、指で 字を 書いた

り、人の 顔を かいたりして 遊びます。
晝になると、いつのまにか、ガラスの 氷も すっかり 消えますが、次の 朝には、また 新しい ちがつた もやうが、美しく あらはれます。

ガラスの 氷も きれい ですが、じゅ氷と いふのは もっと きれい です。これは、木の 枝と いふ 枝が、すっかり 氷に 包まれて しまふの です。ちやうど 水しやうで 作った 木のやう です。



この じゅ氷に 朝日が さすと、きらきらと 光って、みごとに な もの です。風が 吹いて 来ると、木の 枝が かはいらしい 音を たてます。

満洲に 住んで いる 日本の 子どもたちは、いくら

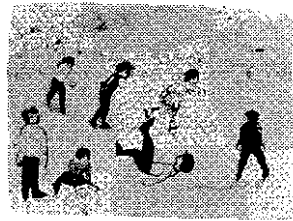
寒くても、元氣よく スケートを します。

さいしよは、スケートを つ

けて 氷の 上に 立つ ことも、なかなか むづかしいの ですが、そのうちに 一メートル、五メートル、二十メートルと、だんだん うまく すべれるやうになるの です。のちには、すべりながら まがったり、後向きに すべったり、友だちと 手を つなぎあつたりして、思ふままに すべります。かう なると、おもしろくて おもしろくて たまりません。

寒ければ 寒いほど、子どもたちは 喜びます。それは、寒いほど、スケート場の 氷が かちかちに なって、すべりよく なるから です。

満洲人の 子どもは、木で こしらへた こまを、氷の上で まはして 遊びます。細い 棒の 先に ひもをつけて、その ひもで こまの 腹を たたきます。すると、こまは 勢よく ぐんぐん まはります。ほつたをつめたい 風に 赤くしながら、む中になつて まはします。



十一 鏡

ねえさん

花子さんは、日の あたる ところへ、小さな 鏡を持って 出ました。

鏡で 日の 光を 受けると、きらきら 光ります。花子さんは、その 光を、二かいの 窓の しやうじにあてて みました。すると、その しやうじを あけて、中から ねえさんが のぞきました。花子さんは、ねえさんの 顔へ 光を あてました。ねえさんは、

「おお、まぶしい。」

といって、手で 顔を かくしました。さうして、

「いたづらな 花子さんね。」

をんどり

勇さんが、えんがはで、鏡を 持って 遊んで みました。そこへ、勇さんに よく なれた をんどりが、ゑさでも もらへるのかと 思つて、やつて 来ました。

勇さんは、をんどりに 鏡を 見せました。

をんどりは、ちよっと おどろいて、逃げださうと しましたが、急に ひきかへして、鏡の 方へ よつて 来ました。

一	天の岩屋
二	參宮だより
三	光は空から
四	支那の春
五	おたましやくし
六	八岐のをろち
七	かひこ
八	おきかな
九	ふなつり
十	川をくだる
十一	少彦名神
十二	田植

初等科國語 一

いつのまにやら
天人は、
春のかすみに
つつまれて、
かもめすいすい
とんで行く、
空にはんのり
富士の山。



十三	にいさんの愛馬
十四	電車
十五	子ども八百屋
十六	夏の午後
十七	日記
十八	カッターの競争
十九	夏やすみ
二十	ににぎのみこと
二十一	月と雲
二十二	軍大利根
二十三	秋
二十四	つりばりの行くへ

一 天の岩屋

天照大神は、天の岩屋へおはいりになって、岩戸をおしめになりました。明かるかった世の中が、急にまっくらになりました。

大勢の神様が、お集りになって、「どうしたら、よからうか。」

と、ござうだんなぎいました。

思ひかねの神といふちゑのある神様が、たいそうよいことをお考へになりました。それによつて、神様がたは、いろいろなことを、なさることになりました。

まづたくさんのかみを集めて、しきりにお鳴かせになりました。

ある神様は、大きな鏡をお作りになりました。ある神様は、きれいな玉をたくさん作つて、首かざりのやうに、ひもにお通しになりました。またある神様は、山へ行つて、さか木を、根のついたままはつて、持つていらつしやいました。

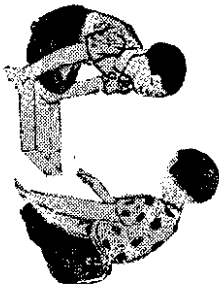
した。

本玉のことは、このさか木に、鏡と玉をかざつて、岩屋の前にお立てになりました。

天のこやねのみこととは、岩屋の前へ進んで、のりとをおよみになりました。

富士 平洋 世界 千因 半集 名
豆 讀 黒 書 帝 加 賀 合 稻 徒 友
元 結 席 腰 征 孫 菊 治 節 皇 陸 線 意
聲 追 負 育 嫁 晚 眺 泣 悲 迎 別 安 申
守 弓 番 恩 腹 打 製 滿 洲 島 匹 岩 寒
羽 指 畫 包 住 場 細 棒 鏡 受 窓 毛 孝
娘 物 餅 供 床 昭 和 錢 始 營 服 着 所
枕 支 骨 武 舍 休 烏 兔 陸 仲 多 拾 數 胸 院 主 兄 所
笛 桃 暖 那 肉 荷 銃 過 語 押 久 段 官

をばさんのうちから、一眠をすましたかひこそ、二十四もらって來ました。それを箱に入れて、ねえさんに見せる
と、
「まあ、かはいいかひこね。でも、桑の葉をどうしたらいいかしら。」
といひました。私は、かひこがほしくてたまらないので、もらって來ましたが、さういはれてみると、うちには、桑の木がないことに気がつきました。
二十四のかひこは、桑の葉をほしさうにして、動いてゐます。私は、竹田さんのところへ走って行きました。あそこの畠に、桑の木があることを思ひ出したからです。
さつそく、桑の葉をもらつて來て、箱の中へ入れてやりますと、ねえさんは、
「葉が大きくて、たべにくいから、きさんでやりませう。」といひました。小刀で、葉を切つてやりました。かひこは上手にたべました。
ある朝、大雨が降りました。風も吹いてゐましたが、私は、いつものやうに、桑をもらつてかへつて來ました。
「ぬれた葉を、かひこにやつてはい



けませんよ。」
と、ねえさんにいはれたので、私は、桑の葉を一枚一枚いねいにふいて、かわかしてから、かひこにやりました。一日ほどたつと、かひこは眠りだしました。私たちがら、横になつてゐるのに、かひこは、頭をちゃんとあげて眠ります。それも、一日中、そのまま眠りとはずすので、首がつかれないうちかと思ひました。
私は、早くまゆを作るところが見たいので、ねえさんに、「いづごろまゆを作るでせう。」と聞くと、
「今、三眠ですから、もうあと一度眠つたら、まゆを作りますよ。」といひました。
むしあつて日がついて、かが出るやうになりました。ある夜、私が本を讀んでゐますと、あまりかが多いので、かとり線香をつきました。
そのあくる日の朝、箱をのぞいて見ると、どうしたこと
でせう、あんなに元氣のよかつたかひこが、みんな弱つてあるではありませんか。
私はおどろいて、ねえさんと呼びました。



しやると、川かみから箸が流れて來ました。みことは、「この川かみに人が住んでゐるな。」とお思ひになつて、川について、だんだん山おくへおはいりになりました。すると、おちいさんとおはあさんが、一人の娘を中において、泣いてゐました。
「なぜ泣くのか。」
と、みことがおたづねになると、おちいさんが、
「私どもには、もと娘が八でございましたが、八岐のをろちといふ大蛇に、毎年一人づつ取られて、残つたのは、もうこの子だけになりました。それに、今年もまた、その大蛇が出て來るところになり、大蛇が、この娘に別れるのが悲しくて、泣いてゐるのでございます。」
と申しました。
「いったい、どんな大蛇か。」
「その目はまつかでございます。一つからだに頭が八つ、尾が八つ。からだは、八つの山、八つの谷につ



くほどで、せなかに、こけも木も生えてをります。」
みことは、この話を聞きながら、
「よし、その大蛇を左いぢてやらう。強い酒をたくさんくれ。それを、八つのをけに入れて、大蛇の來るところに並べておけ。」
とおいひつけになりました。
そのどほりに用意しました。するとまもなく、あの恐しい大蛇が出て來ました。酒を見つけて、八つの頭を八つのをけに入れて、がぶがぶと飲みました。
そのうちに、よひがまはつて、大蛇は、とうとう眠つてしまひました。
みことは、劍を抜いて、大蛇を、ずたずたにお切りにしました。血が、たきのやうに出て、ひの川が、まっかに流れました。
みことが、尾をお切りにした時、かちと音がして、劍の刃がかけました。ふしぎにお思ひになつて、尾をきいてごらんになると、たいそううつつばな劍が出て來ました。
「これは、たふとい劍だ。」
と、みことはお思ひになりました。
みことは、その劍を、天照大神におさしあげになりました。



「ゆうべ、桑をやるのを忘れませんでしたか。」
 「いいえ、新しいのをたくさんやっておきました。」
 「どうしたのでせうね。」
 「ねえさんも考へておましが、

「このへやで、かとり線香をつけませんでしたか。」
 とたづねられて、私は、はっとしました。

「ええ、ゆうべ、つけました。」
 「あ、それですよ。かひこは、あれが大きらひですからね。」

「ねえさん、助るでせうか。」
 「さあ。」

私は、あわてて窓をあけました。桑をもらひに行く途中も、心の中で、「どうぞ、元氣になりますやうに。」といのりしました。

つみたての桑の葉をやる、かひこは、どうやらからだをのばすやうにして、そろそろたべ始めましたので、私はほっとしました。

けれども、どうしても桑をたべようとしなのが、五匹おました。そのうち、だんだんやせて行つて、三日めには、五匹とも死んでしまひました。

四度めの限りをすましたかひこは、二日三日すると、からだもずっと大きくなつて、桑の葉を、おいしさうに、た

くさんたべました。
 そのうちに、青白かったからだだが、だんだんすきとほつて見えるやうになりました。ねえさんは、
 「さあ、もうちぎ、まゆを作りますよ。」
 といひました。

ねえさんに、こしらへてもらつたわらのおうちを、箱の中へ入れてやると、かひこは、静かにはひあがつて来て、「さて、どこにまゆを作らうかな。」といふやうなやうすをしました。

かひこは、糸をはき出しました。目に見えないやうな細い糸を、さかんに口から出して、自分のからだのまはりをおんで行きました。

「あんな青い桑の葉をたべて、よく、こんな白い糸が出て来るものですね。」

と、ふしぎに思つていひます、ねえさんも、
 「ほんたうにね。」
 といひました。

初めは、うすい、うすい紙のやうなまゆでしたが、それが、だんだんあつみをもつて来て、かひこは、まゆの中に、かくれて見えなくなりました。

ある日、竹田さんが遊びに來ました。私が、かひこの箱を見せると、

「あら、きれいなまゆができましたね。」
 と、感心したやうにいひました。

八 おさかな

皿のおさかな、
 どこから來たの。
 皿のおさかな、
 海から來たの。

海はひろびろ
 なみの底、
 たひやかつをが
 ゐたでせう。

こんぶの林が
 あるでせう。
 わかめの野原が
 あるでせう。

皿のおさかな、
 もう一度、
 泳ぐところが

見たいなあ。

九 ふなつり

「このへんが、つれさうだね。」
 と、にいさんが、小川をのぞきこんでいひました。

水草が、たくさん生えておました。きつと、魚がかくれてゐるにちがひありません。私たちは、急いでつりのしたくをしました。

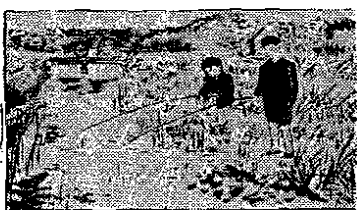
にいさんが、ひゅつと、つり竿をふると、つり糸が、空に大きなわをさがしました。ぽんと音をたてて、うきが水の上へ落ちると、波のわが、だんだん大きくひろがりました。にいさんと並んで、私もつり始めました。

二人は、じつと、うきを見つめました。

あたりは静かで、ときどき、川かみの板橋の上を通る荷車のひびきだけが、聞えて來ます。

びく、びく、びく——にいさんのうきが動きました。にいさんは、あわてて引きあげました。

「なんだ、ゑさを取られたのか。」
 と、つまらなさうに笑ひました。



ました。

「何だらう、あれは。」
と、大國主神は、お供の者におっしゃいましたが、お供の者にもわかりませんでした。

だんだん近寄って来るのを、よく見ると、豆のさやのやうな物を舟にして、それに何か乗ってゐました。
「豆のさやに、虫が乗ってゐます。」

と、お供の者が申しました。

しかし、虫ではありませんでした。

虫の皮を膚物にして着ていらつしやる、小さな神様でありました。

大國主神は、

「小さな神様だなあ。いったい、何といふお方だらう。」
と、おっしゃいますと、お供の者は、

「こんな小さな神様を、私は、見たことも、聞いたこともございせん。」
と申しました。

「あなたは、どなたですか。」

と、大國主神は、その神様に、おたづねになりましたが、へんじをなさいません。

その時、ひょっこり出て来たのは、ひきがへるでありました。大國主神は、



「おお、ひきがへる、よいところへ来た。おまへは、方々へ出歩いて、何でもよく知ってゐるが、この小さなお方の名を知らないか。」

ひきがへるは、目をぱくりきせながら、

「いや、ぞんじません。きつと、あのもの知りのかかしが、知ってゐるでございませう。」
と申しました。

かかしは、田の中に立つて、四方を見てゐるので、何でもよく知ってゐました。大國主神は、かかしに向かつて、
「おうい、おまへは、この小さなお方を知ってゐるか。」
すると、かかしは、

「それは、少彦名神といふ神様でございます。からだは小さいが、たいそうちゑのあるお方でございます。」
と答へました。

大國主神は、たいそうお喜びになつて、少彦名神を、おうちへおつれになりました。

二人は、兄弟のやうに仲よくなさいました。心を合はせて、野や山を開いて田や畠にしたり、道をつれたり、川に



橋をかけたりなさいました。人間や、牛や、馬の病氣も、おなほしになりました。

ある日、少彦名神は、おっしゃいました。
「私は、いつまでも、ここにあるわけにはいきません。これで、おいとまいたします。」



大國主神は、おどろいて、

「どうして。どこへおいでになるのですか。」

「遠いところへ行きます。」

「何しに行くのです。」

「新しい國を開きに。」

かういひながら、少彦名神は、あはの葦につかまつて、すると、おのぼりになりました。すると、一度しなつたあはの葦が、はね返るひやうしに、小さな神様のおからだは、ぼんと空へとびあがりました。

「さやうなら。」

と一聲おっしゃつたまま、少彦名神は、もうお姿が見えなくなつてしまひました。



そろた、出そろた、
植ゑ手も そろた。
植ゑよう、植ゑましよ、
み國のために。
ことしやほう年、穂に穂が咲いて、
みちの小草も 米がなる。

十三 いさんの愛馬

國男、今日は、軍隊の馬のことを知らせてあげよう。
毎朝、にいさんたちは、きつと馬屋へ行く。馬屋には、それぞれ受持の馬が、ちゃんと待ってゐるからだ。
馬屋へ行つて、馬をねどこから外へつれ出し、ひづめを洗ひ、鐵で作ったくしとはけで、馬のからだをこすつて、きれいにしやる。すると、馬は、おとなしくじつとしてゐる。氣持がよくて、うれしいのだらう。

くに子も、ひさ子も、
あと押し頼むぞ。
にいさん、しつかり。
押せ押せ、車を、
よいしょ、よいしょ。

きうりも、おなすも、
かぼちゃも、トマトも、
にこにこしています。
押せ押せ、車を、
よいしょ、よいしょ。

おかあさんが待つてる。
お客も待つてる。
急いで、かへらう。
押せ押せ、車を、
よいしょ、よいしょ。

十六 夏の午後

「ジューッ」と、せみが鳴きだした。
ぼくは、はだして庭へ出た。せみは、桐の水で鳴いてゐる。



夏のすみの日ははり
は、暑い日をいっぱい受
けて、金のお皿のやうな
のが、三つ咲いてゐる。
今では、ぼくよりもずつ
とせいが高いが、これも



る。そつと行つて見ると、一メートル半ぐらゐの高さの
ところに、あぶらぜみが
一匹止つてゐる。せいの
びして、手をのばし
てみたが、だめだ。ぼ
くの手先より二十セン
チも高い。取れないと
思ふと、くやしくなつて、木の幹をとんとたたく。せみ
は、びつくりしたやうに、「ジジ」と聲をたてて、とんで
行つた。

井戸ばたへ行つて、足を洗つた。さあつと、つめたい水
をかけると、いい氣持だ。げたをはいて、うらの畠へ行つ
てみる。

なすも、きうりも、みんな暑さうにぐつたりしてゐる。
きうりにそへて立ててある竹に、とんぼが止つたり、はな
れたりしてゐる。

七月十七日 火曜日 晴

けさは、朝顔が三つ咲いてゐた。水
色が二つに、赤が一つ。

学校では、四時間めに、共同作業を
した。ぼくたちは、校舎のうらの草を
むしつた。先週の金曜日に抜いたの
に、もうのびた草がだいぶある。一本
一本きれいに抜いた。とし子さんが
「きやつ」といったので、見ると大きなみみずがある。
先生が、
「みみずぐらゐに、どうしてそんな聲をたてるのです。」
とお笑ひになった。



十七 日記
七月十六日 月曜日 晴

朝起きると、おとうさんは、も
う庭の朝顔のせわをしてゐられ
た。



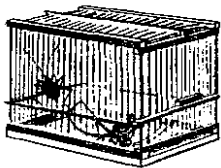
「ほうら、こんな大きな、赤い花
が二つ咲いた。」
と、にこにこ顔。

学校では、三時間めに、三年生以上の合同體操があつ
た。暑い夏の日が、かんかんてりつつける中で、行進をした
り、かけ足をしたり、體操をしたりした。

七月十八日 水曜日 くもり

くもつてゐたせゐか、朝からむし暑かつた。朝顔は、二
つ咲いてゐた。赤一つ、白一つ。
三時間めの合同體操の時は、汗でべとべととした。夏は、
かんかんとしてた方が、氣持がいいと
思つた。

夕はんがすんでから、おかあさん
と、ねえさんと、ぼくと三人で、えん
日へ行つて、すず虫を買つてかへつ
た。ねる時には、涼しさうな聲で鳴い



屋 初 短 息 茂 殘 酒 恐 菓 糖 愛 曲 綿
 氷 初 横 香 途 死 感 皿 底 竿 板 許
 刃 桑 鐵 側 煙 干 寄 者 皮 莖 姿 植
 唱 隊 面 狀 賴 電 掛 留 桐 幹 井 暑
 穂 幘 記 晴 以 體 操 共 業 週 汗 念
 樂 幘 競 發 繼 組 選 號 令 決 勝 最 位
 室 競 發 繼 組 選 號 令 決 勝 最 位
 仰 相 問 承 案 飛 運 暗 命 甲 功 章
 倍 第 彈 回 信 淚 陣 暗 命 甲 功 章
 露 願 鯛

初等科國語二

一 神の劔
 二 稻刈
 三 祭に招く
 四 村祭
 五 田道間守
 六 みかん
 七 潜水艦
 八 南洋
 九 映畫
 十 聖德太子
 十一 養老
 十二 ぼくの望遠鏡

十三 火事
 十四 軍旗
 十五 ゐもん袋
 十六 雪合戦
 十七 菅原道真
 十八 梅
 十九 小さな温床
 二十 雪舟
 二十一 三勇士
 二十二 春の雨
 二十三 大れふ
 二十四 東京

一 神の劔

神武天皇は、日向をおたちになつて、大和の方へお進みになりました。

はるばると海を渡つて、紀伊の熊野といふ村にお着きになりますと、ふいに、大きな熊が山から出て来て、すぐ、またかくれてしまひました。

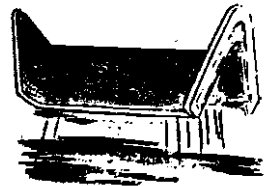
天皇は、ふしぎに、ねむくおなりになりました。お供をしてゐた大勢の御軍人たちも、ねむくになりました。いつのまにか、天皇は、おやすみになつていらつしやいます。御軍人たちもみんな、ぐうぐうねてしまひました。

この村に、高倉下といふ人がゐました。夜、ふしぎなゆめを見ました。

天照大神が、たけみかづちの神といふ強い神様に、かう仰せになつてゐます。



がみたことも、なんぎをしてゐるであらう。」



すると、たけみかづちの神は、「この劔を、天皇にさしあげることになつた。熊野の村に、高倉下といふ者がをりますから、その者の倉を目あてに、この劔を落します。——高倉下よ。朝になつたら、きつとこの劔を、天皇にさしあげるやうに。」

この御聲とともに、劔が天から落ちて來ました。高倉下は、はっと目がさめました。朝早く起きて、倉へ行つて見ますと、屋根をつき抜けて、ゆめに見た神様の劔が、ちゃんとありました。

高倉下は、急いで、天皇のおやすみになつていらつしやるところへ、かけつけました。

高倉下が、劔を天皇にさしあげると、「おお、長くねたものだ。」と仰せになつて、天皇はお目ざめになりました。さうして、劔をお受け取りになりました。

すると、あの熊になつて出て來たわる者たちは、この劔で、みんな殺されてしまひました。

御軍人たちは、目をさました。勇ましくふるひ立つて、大和へ進軍しました。

學校がすむと、すぐ、たんぼへ行きました。今日は、うちの稲刈です。よいお天気で、あちらでもこちらでも、稲を刈ってゐます。



田のあぜに、むしろを敷いてもらつて遊んでゐた弟が、遠くから私を見つけて、

「ねえさん。」

と喜んで呼びました。

「ただいま。」

といつて、私はかばんをおろしました。

稲を刈つてゐられたおとうさんと、おかあさんは、腰をのびしながら、

「やあ、もう學校がすんだのか。早かったな。」

「そこのかごの中に、おいもがあるから、二人でおあがり。」といはれました。

ふかしたさつまいもをかごから出して、弟といっしょにたべました。

稲がだんだん刈られて来るせゐか、いなごが、たくさんこちらへ飛んで來ます。さうして、稲の葉や莖に止ります。取らうとしても、なかなかつかまりません。

大きなのが一匹、すぐそばの稲の葉に止りました。そつ

と近づくと、くるりと葉のうらへまはつて、足の先だけ見せてゐます。右の手で、すばやく、葉といっしょにつかまへました。左の手で、頭のあたりをつかむと、あと足をふんばつて、逃げさうにしました。あわてて、ぎゅっとつかんだら、あと足が取れてしまひました。下に置くと、飛べないので、地面をはつて行きます。

弟は、いなごを飼ふのだといつて、土でかこひをこしらへました。いなごは、せまいかこひの中から、外へはひ出さうとします。

「この牛は、しゃらがないうぞ。」

と、大きな聲で弟がひとりごとをいひます。弟は、牛を飼つてゐるつもりなのです。私は、をかしなうなつてふきだしました。

赤とんぼが、すいすいと、空を飛んでゐます。

ざくざくと、稲を刈る音が聞えます。私も、何か手つたはうと思つて、おとうさんや、おかあさんの方へ行きました。刈つたあとには、くくつた稲の束が、田の上に並べてあります。

おかあさんは、刈るのをやめて、稲の束をまとめて、稲かけの方へ運んでゐられます。私も、少しづつ持つて運びました。

一人ぼっちになつて遊んでゐた弟が、たいくつして、

ゆり子様

お手紙、ありがたうございます。去年のお祭のことを思ひ出して、急になつかしくなりました。お手紙のことを姉に申しましたら、たいへん喜んで、ぜひ参りたいといつてゐます。

久しぶりでおあひして、みなさんといっしょに、氏神様へお参りをしたり、おかぐらや、すまふを見たりしたいと思ひます。今年は、めづらしい牛行列が見られるさうですね。今から楽しみにしてゐます。

二十四日の午後三時ごろ、そちらへ参ります。どうぞ、おかあさんによろしくおっしゃってください。

みよ子さんのおみやげに、わたしの作ったお人形さんを、持つて行つてあげたいと思ひます。さやうなら。

十月二十日

ゆり子

とし子様

四 村 祭

村のちんじゅの神様の、今日は、めでたいお祭り。

どんだんひやらら、

どんひやらら、

三 祭に招く

「ああん。」
といひました。おかあさんが、
「おまへ、行つて遊んでおやり。」
といはれたので、私は、また弟の方へ行きました。それから、夕方まで、弟といっしょに遊びました。

うちの山で、もすが鳴いてゐます。氏神様のお祭のころになりました。去年、あなたといっしょにお参りして、楽しかったことが思ひ出されます。

今年は、二十五日のお祭の日が、ちやうど日曜日になります。二十四日の午後から、ねえさんをさそつて、ぜひ來てください。

毎年ある花火は、今度はやめださうですが、二十四日の晩は、いろいろな店が出てにぎはひます。お祭の日はおかぐらや、すまふがあります。それに今年は、五年め一度ある牛行列が通るさうです。牛にきれいな着物を着せ、牛飼が、赤白のたづなを引いて通るのは、まるで繪のやうださうです。

どうぞ、ぜひおいでください。母も、みよ子も、お待ちしてゐます。

十月十八日

とし子

朝から聞える笛たいこ。

としも豊年満作で、

村はそう出の大祭。

どんどんひやらら、

どんひやらら、

夜までにぎはふ宮の森。

治る御代に、神様の

恵みたたへる村祭。

どんどんひやらら、

どんひやらら、

聞いても心が勇みたつ。

五 田道間守

垂仁天皇の仰せを受けた田道間守

は、船に乗って、遠い、遠い外国へ行きました。

遠い外国に、たちばなといって、みかんに似た、たいそうかをりの高いくだものがあることを、天皇は、お聞きになつていらつしやいました。田道間守は、それをさがしに行くことになったのです。

遠い外国といふだけで、それが、どこの國であるかは、



わかりません。田道間守は、あの國この島と、たづねてまはりました。いつのまにか、十年といふ長い月日が、たつてしまひました。やつと、あるところで、美しいたちばなが生つてゐるのを見つけた。

田道間守は、大喜びでそれを船に積みました。枝についたままで、たくさん船に積みました。さうして、大急ぎで、日本をさして歸つて來ました。

「さだめて、お待ちになつていらつしやるであらう。」

さう思ふと、田道間守には、風を帆にいっぱいはらんで走る船が、おそくておそくて、しかたがありませんでした。



日本へ歸つて見ますと、思ひがけなく、その前の年に、天皇は、おかくれになつていらつしやいました。田道間守は、持つて歸つたたちばなの半分を、皇后にけん上しました。あとの半分を持つて、天皇のみささぎにお参りしました。枝についたままの、美しい、かをりの高いたちばなを、みささぎの前に供へて、

田道間守は、ひざまづきました。

「遠い、遠い國のたちばなを、仰せによつて、持つてまゐりました。」

かう申しあげると、今まで、おさへにおさへてゐた悲しさが、一度にこみあげて、胸は、はりさけるばかりになりました。田道間守は、聲をたてて泣きました。

田道間守は、昔、朝鮮から日本へ渡つて來た人の子孫でした。しかし、だれにも負けない忠義の心を持つてゐました。

泣いて泣いて、泣きとほした田道間守は、みささぎの前にひれふしたまま、いつのまにか、つめたくなつてゐました。

六 みかん

寒い冬の風が吹くころは、みかんの木といふ木に、むしろやこもの着物を着せて、暖くしてやります。それでみかんの木は、しもや雪をじつとこらへて、靜かに眠つてゐます。

春になつて、暖い太陽が山一面にかがやきだすと、このみかんの木に若芽がすくすくとのびあがり、やがて、まっ白な花が咲いて、何ともいへない、よいかをりがあたりに満ちあふれます。その花が散つたあとには、かはいらしい

青い實が生ります。

夏が來て、海の方から、そよそよと風が吹いて來ると、この實は、日に日に大きくなります。すると、いろいろな害虫が、葉や枝にとりついて、みかんの木を苦しめます。そのままだしておけば、みかんの木は、弱つてしまひますから、いろいろな薬で、害虫を何べんも除きます。かうして育てたみかんの實は、秋のお祭のたいこが、村々に鳴りひびくころになると、ぼつぼつ、黄色みをおびて來ます。もうかうなつたらしめたものです。



秋が終りに近づき、そろそろ冬が始まるころには、この黄色にだんだん赤みが増して來て、おいしさうなみかんが、山といふ山、谷といふ谷を、うづめつくしてしまひます。そのけしきの美しさと、みかんを作つた人たちの喜びとは、ことばでは、とてもいひあらはすことができません。

かごを持つて山へのぼる人、みかんをせおつて山をおりて來る人、上手にはさみを使って、みかんを取りながら、みかん取り歌を歌ふ人たちで、急に、山はにぎやかになります。

山から取つて來たみかんは、一家そう出で、いろいろな

種類に分けて、きちんと、箱につめて送り出します。その時は、目がまはるほどいい感じがします。しかし、長い間かはいて育てたみかんが、日本中はもちろん、遠い支那へも、満洲へも、旅だつのだと思ふと、心が勇んで、みんなにこにこしながら、せつせと働きます。

かうして、あたたかい心で育てられ、しんせつな手で、荷作りされたみかんは、汽車や汽船にのせられて、ふるさとを出発して行きます。

七 潜水艦

春雄、をぢさんは、今度、潜水艦の艦長を命ぜられた。今日は、潜水艦のことを話してあげよう。

潜水艦は、からだが小さい。だが、軍艦旗を朝風になびかせながら、軍港を出て行く時、港内にいる軍艦と、たがひにあいさつのラッパを吹きかして、海の上を進んで行くのは、何ともいへないゆくわいなものだ。

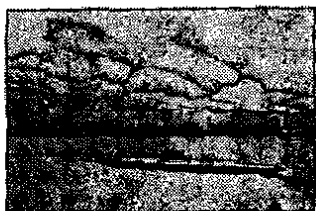
ところで、この潜水艦が、水の中へもぐるのだと聞くと、沈んだきりで、浮かないことがありはしないかと、思ふものもあるやうだが、今の潜水艦は、うまくできてゐる



から、そんなしんばいは、まったくない。もぐりたいと思へば、いつでも、潜水艦の中のたくさんのタンクへ、水を入れて沈む。その水を押し出せば、自由に海の上へ浮くことができるのだ。

水の中へもぐつたら、海の上が見えないだらうと思ふであらうが、細長い望遠鏡のやうなものがあって、海の上を、すっかり見渡すことができる。また、水の中で音を聞きわけける機械もあって、敵艦の進んで来る音を聞きわけながら、敵に近寄ることもできる。だから、潜水艦の乗組員の中には、どんな音でも聞きわけけるやうな人が、なくてはならない。春雄も、今のうちから、いろいろな音が、聞きわけられるやうにしておくことがだいじだよ。

これらのほかに、みかたの潜水艦どうしで、信號しあふ機械がある。海の深さが、どのくらいあるか、敵艦までのくらゐはなれてゐるか、自分の乗つてゐる潜水艦が、今、何メートルの深さに沈んでゐるか、どれほどの早さで走つてゐるか、それらを一々をはかる機械がある。だから、潜水艦は、水の中にもぐつてゐても、海の上にあるのと同じやうに、どこへでも行くことができる。



潜水艦には、大砲もある、機関銃もある。中には、飛行機を持つてゐるものもあるが、やはり、いちばんだいじな武器は魚雷だ。魚雷をうち出すと、生きた魚のやうに、水の中をくぐりながら、敵艦をめがけて行つて、つきあたる。山のやうな戦艦や、巡洋艦や、航空母艦も、この魚雷にはちみあがつてしまふのだ。思っただけでも、ゆくわいではないか。

潜水艦は、見はりをしてゐる大きな敵艦にこっそり近寄つたり、遠く海を乗りこえて、敵の港の中へしのびこんだりして、ふいうちをする。そのためには、乗組員に、勇気とおちつきがたいせつだ。かうした勇気やおちつきは、子どもの時から、きたへるやうにしなければならぬ。

どうだ春雄、大きくなつたら、をぢさんのやうに、潜水艦に乗つて、お國のために、働きたくはないかね。

八 南洋

今日は日曜日で、子ども常會の日です。勇さんのうちで、げんとう會がありました。

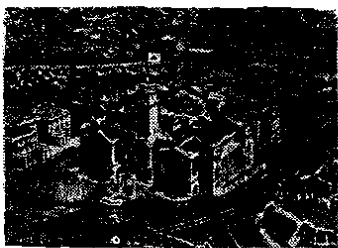
正男さんも、太郎さんも、次郎さんも、花子さんも、春

枝さんも、ゆり子さんも、みんな集りました。

勇さんのおとうさんは、にこにこして、「今日は、おもしろい南洋の寫眞を、うつしてあげませう。」といはれました。

黒い紙をはつて、部屋を暗くしました。かべには、白い布がはつてあつて、それに、南洋のけしきが、次から次へとうつて行きました。

いちばん初めに、美しい日の丸の旗のひらめいてゐる昭南島のけしきがうつりました。



「どんなことがあつても落ちないと、イギリスがいばつてゐたシンガポールも、わが陸海軍の勇ましい兵隊さんたちによつて、攻め落されてしまひました。名も、昭南島とあらためられて、このやうに日の丸の旗が、南の空にひるがへつてゐるのです。」と、勇さんのおとうさんが説明さ

れたので、みんなはうれしくてたまりませんでした。

青い海に、靜かにかげをうつしてゐるやしの木の寫眞がうつりました。

「南洋の海は、明かるくてまっさをですから、着物でもひ

います。」

と涙をこぼして、ありがたがるおばあさんもありません。光明皇后は、ときどき、この病院へおいでになって、病人たちをお見まひになりました。やさしいおことばを、たまはることさへありました。

このやうに、しんせつにしていたくので、どんな重い病氣でも、きつとなほるといふうはさが、いつのまにか日本中にひろがりました。

光明皇后は、手足の痛む病人や、傷の痛みがなほらないやうな者のために、薬の風呂を作つておやりになりました。この風呂には、いつもあたたかい薬の湯が、あふれてゐました。

「皇后様が、御自分で、病人のせわをなさるといふことが、ほんたうだらうか。」

「こんなにしんせつにしていたいてゐれば、皇后様におせわをしていただくのと、同じことではないか。」

「まつたくその通りだ。うはさに聞けば、皇后様は、千人の病人のせわをなさるといふ大願を、お立てになつたさうだ。ほんたうに、もつたいないことだ。」

このやうな話をしながら、薬の風呂にはいる病人が、いつも絶えませんでした。

光明皇后は、この薬の風呂へもおいでになつて、一人一

人をおせわなさいました。さうして、千人めの病人のおせわをなさつた時、急に病人のからだから光がさし出て、あたりが金色にかがやき渡つたといふことです。

七 苗代のころ

春の少し暖い晩、「くく、くく。」と、蛙の鳴く聲がします。

そのころから、晝間は、廣いたんぼの一部で、もう苗代の仕事が始ります。黒い牛が、ゆつくりと引いて行くからすきのあとには、ほり返された新しい土が、暖い日光に照らされます。



土がほり返され、くれ打ちがすむと、田に水がなみなみと張られます。今度は、牛がまぐはを引いて、泥水の中を、行つたり来たりします。かうして、田の土は、だんだんこまかく耕されて行きます。

夜、遠くの田で鳴く蛙の聲が、「ころころ、ころころ。」と、にぎやかに聞え始めます。

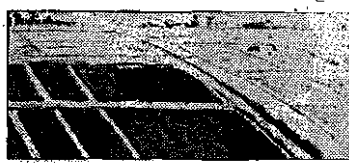
種まきがすんで十日あまりたつたころ、浅い水の上に、二センチか三センチぐらゐの、若々しいみどりの苗が出そろつて行くのは、見ただけでも氣持のよいものです。ちや

うど、たんざく形のみどりの敷物を、きちんと間を置いて、敷き並べたやうです。

苗が、二十センチぐらゐのびて、

葉先が、朝風にかかるくゆるやうになると、廣いたんぼは、しだいににぎやかになります。そろそろ、汗ばむくらゐ暑い日ざしを受けて、男も、女も、

牛も、泥田の中で働きます。ここの田も、あそこの田も、ほり返した土のかたまりの間には、もうひたひたと、水



がたたへられてゐます。

蛙のすみかが、かうして、たんぼいつばいにひろがるのです。晝間は、働く人や、牛にゑんりよをするやうに、聲をひそめてゐますが、夕方から夜になると、さも自分たちの世界だといふやうに、さわぎたてます。家の前も、後

も、横も、まるで夕立の降るやうに、蛙の聲でいつばいで

八 地鎮祭

私たちの學校では、新しい講堂が立つことになりました

た。今日は、その地鎮祭がありました。

講堂は、東側の教室の後に立ちます。午前十時に、四年以上の生徒が、そこに集合しました。

校長先生が、地鎮祭といふのは、新しく家が立つ土地の神様に申しあげて、その家を、いつまでも守つていただくやうに、お祭をするだいたいの儀式だとお話なさいました。敷地の中ほどに、せいの高い竹が四本立てであつて、それにしめなはが張つてありました。

そこへ神主さんが、三人お見えになりました。三人ともまつ白な着物を着て、えぼしをかぶつて、しやくを持つて、木のくつをはいてゐられました。

「氣をつけ。」

と、山田先生が號令を掛けられると、校長先生が、「今から、地鎮祭が始ります。」といはれました。

神主さんは、大麻をふつて、みんなのおはらひをしてくださいました。それから、「オー。」と聲を高くあげて、神様のおいでになる先拂ひをなさいました。

次に、お供へものをいろいろと、白木の机の上に運ばれました。お米や、お酒や、お餅や、魚・大根・にんじん、おしまひに、いちご・バナナなどを、それぞれ三方にのせて供へられました。

四	十二	小さな傳令使
	十一	大演習
	十	「グライダ―」日本號
	九	林の中
	八	萬壽姫
	七	ひよどり越
	六	くりから谷
	五	觀艦式
	四	大連から
	三	バナナ
	二	燕はどこへ行く
	一	船は帆船よ

初等科國語四

十三	川主手
十四	扇の的
十五	弓流し
十六	山のスキー場
十七	廣瀬中佐
十八	大阪
十九	大砲のできるまで
二十	振子時計
二十一	水族館
二十二	母の日
二十三	防空監視哨
二十四	早春の満洲

一 船は帆船よ
船は帆船よ、
三本マスト、
千里の海も なんのその。
萬里の波に
夕日が落ちて、
なほも南へ 氣がはやる。
とまり重ねて
心にかかる、
安南・シヤムは まだはるか、
椰子の林に
照る月影を、
昔の人は どう見たか。
日本町に
ふけ行く夜の
ゆめは故郷を かけまはる。

「撃つなら撃て。その代り、長官の命はないぞ。」
といつて、きつとあたりをにらみました。
「いや、撃つな。撃つなといへ。」
目を白黒させながら、ノイツは、かけて来て来たオランダ
人にいひました。
兵士は、仕方なく撃つことをやめました。
それから彌兵衛は、ノイツをしばりあげたままで、長い
間だんばんをつづけました。
とらうノイツは、これまでたびたび没收してゐた荷物
や、武器・船具、そのほかすべての物を返すことを約束し
ました。
数日のうち、彌兵衛を船長とする二さうの日本船は、受
け取つた荷物をいづばい積み、おまけにオランダ船一さう
を引きつれて、堂々と臺灣の港を出航しました。
「ヤヒョーエドノ」といふ名が、そのち、オランダ人の
間に響き渡りました。

潮銀狩 調拂 標延 從祀 座奧 給
汝討 勒失 絕祈 任特 丈震 麻固 給
傷術 當櫻 遣族 配寢 湯照 泥耕 固給
講式 敏等 科全 現賊 圍覺 悟低 附給
越輪 齒航 景振 妙造 堤市 街附 附給
坂汲 除幅 尺危 油注 錦伐 探筋 筋給
整總 故報 告奉 燈壁 精養 管末 末給
柔縱 割直 完愉 快離 柳幕 災垣 垣給
民質 素對 老宅 央圓 法領 未往 往給
商占 稅具 責恥 求可 吐約 約給

は、きつと
るのを、待ちこがれてゐます。ちらりと燕の姿を見た人
春になると、だれもが、このめづらしいお客の歸つて來
下に作つた古巢が、なつかしいでせう。

稲田を、思ひ浮かべてゐるでせう。何よりも、あの家の軒
を、思ひ浮かべてゐるでせう。青々と植ゑつけられた夏の
です。その小さな胸には、若葉のもえる日本の春の美しさ
と思へば、もう失もたてもたまらず、北をきして進むの
すが、燕は、決して自分の國を忘れません。日本に春が來
日本からオーストラリヤまでは、一萬キロ以上もあり
かなり多いといふことです。

い旅行を續けるせぬか、途中で死んで歸つて來ない燕も、
あることかわかりました。ただ、あの小さなからだで、長
い方法で、このことを調べてみますと、やはりさうで
同じ集へもどつて來るといふのです。近年になつて、いろ
つまり、今年ある家の軒下で巢を作つた燕が、來年また、
昔から、燕は、同じ家に歸つて來るといはれてゐます。

たといふことです。

ら、十月の初めにかけて、汽車や飛行機で、何回にも送
から、これを送るのはたいへんなことでした。九月の末か
南の暖い國へ送つてやりました。何しろ十萬といふ數です
へてやりました。さうして、つかれのなほるのを待つて、

三 バナナ

「今日、始めて燕を見だよ。」
といつて喜びます。わけでも、自分の家へ、いそいそと歸
つて來た燕を迎へる人の心は、どんなにうれしきことであ
う。

今日はバナナのお話をしましょう。

あの黄色な皮をむくと、中から白い、柔かな實の出て來
るバナナは、きつとみなさんの好きな果物にちがひありま
せん。ところで、あのバナナが、どこでできるか、どうい
ふ植物に生るか、みなさんはそれを知つてゐますか。

私たちのたべる、あの美しいバナナは、臺灣のゆたかな
日光を受けて、育つた果物です。私たちか、「ばせう」と
いつてあるものに、よく似た植物に生る果物です。

かういふと、みなさんは、臺灣にさへ行けば、バナナ
本がどこにでもあつて、黄色なのを、そのまま取つてたべ
るのだなと思ふかも知れませんが、それは大きなまちがひ
です。

いくら臺灣でも、あの美しいバナナが、野生でできるの
ではありません。ちやうど、みなさんのたべる、おいしい
梨や水蜜桃などが、畠でだいに育てられた木に生るのと
同じことです。梨畠や桃畠はいつて、枝のまきもぎを取

二 燕はどこへ行く

夏の末ごろ、燕が、電線や物干竿に、五六羽ぐらゐ並ん
で止つてゐるのを、よく見かけます。時には、十羽二十羽
も、ずらりと並んでゐることがあります。その中には、親
燕もゐますが、今年生まれた子燕が、たくさんまじつてゐ
ます。もう大ききだけは、親燕と同じですが、まだ口ばし
の下の赤色が、親燕ほどくありません。口ばしの兩わき
が、いくぶん、黄色に見えのさへあります。

かうして、大勢の燕が並んでゐるのを見ると、何かし
ら、相談でもしてゐるやうに見えます。まもなく、去つて
行かなければならぬ日本に、なごりを惜しんでゐるのか
も知れません。これから行かうとする遠い國のことを、話
し合つてゐるのかも知れません。

やがて、九月もなかばを過ぎると、燕は、そろそろ日本
を去つて行きます。十月には、續々と去つて行きます。十
一月の初めになれば、もうほとんど、その姿を見せなくな
つてしまひます。

いつたい、どこへ行くのでせうか。

燕の行く先は、遠い、遠い南の海のかたたです。

東京から、四千キロもあるフアイデンで、ある年の十月
の末、子どもが燕をつかまへました。すると、その右の足



に、日本の文字を記した、小さな金属の板がついてゐまし
た。それによると、埼玉縣のあるところで、試みにしるし
をつけて、はなしたものだといふことがわかりました。

しかし、燕はもつともつと、南へ飛んで行くのです。南
洋の島々から、中には、さらに海を越えて、遠いオースト
ラリヤまで行くのがあるといふことです。

燕は、鳥の中でも、いちばん早く飛ぶ鳥です。汽車や自
動車も、かなはないくらゐの早さですから、何百キロの海
を、一気に飛ぶことも、決してふしぎ
ではありません。しかし、その中に
は、今年生まれた子燕がたくさんゐま
す。また、時にあらしや、そのほかの
思ひがけない災難に、あはなれともか
ぎりません。

昭和六年の秋のことでした。ヨロ
ッパのある國で、約十萬羽の燕が、急
に落ちて來たことがあります。その年
は氣候が不順で、九月の中ごろ急に寒くなり、雨が降り續
きました。をりから南へ飛行中だつた燕は、食にうゑ、つ
めたい雨にすぶぬれになつて、もう、身動きもできなくな
つてしまつたのです。そこで、その國の人々は、このつか
れはてた鳥を拾ひ集めて、暖い家に入れてやり、食物を與

てたべたら、みなさんはきつとしかられるでせう。臺灣のバナナにしても、それと同じことなのです。

臺灣では、よく山ぞひの土地に、バナナが植ゑてあります。ちよつと遠くから見ると、バナナの畠は、キャベツか、それとも、カンナでも作つた畠のやうな感じがします。それほど、あの大きな、ばせうに似た植物が、きちんと行儀よく、しかも、たくさん植ゑてあるのです。ところによると、何百メートルといふ高い山の斜面が、ほとんど全部、バナナ畠であることがあります。



これほどたくさん植ゑてあるバナナが、一本一本だいににされてゐます。まはりの草を取つたり、肥料をやつたり、そのほか、いろいろせわをしてやるのです。實が生ると、梨や桃と同じやうに、袋まで掛けてやるのです。

バナナは、苗を植ゑてから早くて十箇月、おそくても一年二箇月たつと、數メートルの高さに成長して、花が咲きます。古い株を切つて出た芽は、それよりも早く成長して花が咲きます。

まづ、葉と葉の間から、太い、長い一本の軸が出ます。

それが花の軸で、その先に、赤むらさき色の、大きな蓮のつぼみのやうなものがつきます。

やがてそれが開くと、中に黄色な花が、矢車のやうに並んで咲きます。かうして、花が次から次へと、何段かに咲いて行つて、ふさのやうになります。花が咲いてから三四箇月たつうちに、このふさがだんだん大きくなつて、それにぎつしりと、みなさんのたべる、あのバナナが生るのです。



バナナは、まだ青いうちに取つてかごにつめ、船に積んで遠方へ送ります。臺灣から、神戸や、東京へ通ふ汽船といふ汽船は、いつもバナナを積んでゐます。

青いバナナは、むろへ入れて置くと、四五日のうちに、皮が黄色になり、おいしい味が出て來ます。

太陽のゆたかな熱と光とを吸つて、すくすくと育つた臺灣のバナナは、かうしてみなさんのお目にかかります。北海道や樺太はいふまでもなく、北支那から、北滿洲の雪の夜の家々にも行つて、みんなを喜ばしてゐます。

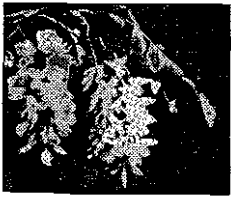
四 大連から

今はちやうど、菊の花がたくさん陳列されてゐます。それから、アカシヤの並木の繪はがきもあつたでせう。あの下を何度も通りました。白いふさになつた花の咲くころは、よいにほひがして、そこを馬車に乗つて走るのは、楽しいものです。並木道をのぼつて行くと、忠靈塔が立つてゐます。高いところにそびえてゐるので、町からよく拜むことができます。

大連の港は、ずるぶん大きくて、毎日たくさん船が出たり、はいつたりして、そのたびに、貨物が山のやうにおろされたり、積み込まれたりします。

大連から、特別急行列車の「あじあ」が出ます。これでも新京へは八時間半、ハルビンへは、十二時間半で行くことができます。また内地へは、毎日のやうに汽船が出ますので、それに乗ると、四日めには神戸に着きます。旅客機で朝たてば、夕方には大阪に着きます。

滿洲國には、いろいろな民族が集つてゐて、みんな楽しく働いてゐます。これらの人たちは、日本語を、一生けんめいにおぼえようとしてゐます。たとへ、これらの民族のことばがちがつてゐても、やがて日本語を通して、たがひにお話ができ、心持が合ふやうになります。このあひだ、支那町を見に行つた時、おもしろいかんばんが見つけられました。赤い布ぎれのふさをつるしたのですが、何の



みなさん、たびたびお手紙をありがたう。元氣で何よりです。私もずつと丈夫で、毎日楽しく暮してゐます。きのふは、明治節でした。講堂の壇に、かざつてあつた菊の花を見て、ふと、みなさんのことを思ひ出しました。去年の今ごろ、學校園の菊の花を寫生しましたね。私の送つてあげた大連の繪はがきや、地圖が、教室に張つてあるさうですね。あの地圖を見てもわかるでせうが、町の名に、日露戰爭當時の將軍がたの名が取つてあります。大山通とか、乃木町とか、東郷町とか、みなさうです。このほかまだありますから、さがしてごらん下さい。滿洲は、前から、日本と深いつながりがあるわけです。



町には、いくつかの廣場がありますが、私は、繪はがきにある大廣場がすきです。圓形で、きれいな植込みのある廣場です。ここで、満人の子どもや、ロシアの子どもたちが、よく遊んでゐます。

どりがかつたこずゑを延してせいのびをし、小さな芽をつけ始めます。遠くから、やなぎの並木を見ると、うすみどりにかすんで見えます。

このころ、夕やけの空を、日が落ちて行くのは、みごとなものです。その大きなこと、何といつたらいいでせうか、ふたかかへもありさうな大きな夕日です。見渡すかぎり平な地平線に、大きな夕日が赤々とはいって行きます。かうして、一日一日と、のどかな春になつて行くとともに、春のいそがしい仕事が始つて行きます。

雁の群が、シベリヤの野山に卵を生まうとして、さかんに空を渡つて行きます。日本から来て、玄界なだを越え、満洲から、もつともつと北をめざして、飛んで行きます。

かさぎは、巢を作らうとして、あちらこちら飛びまわります。かさぎは、毎年新しい巢を作つて、ひな鳥を育てるのです。

農夫たちは、廣い、廣い畠を耕し始めます。すつかり耕した畠に、大豆や、かうりやんなどの種をまくころは、もう満洲の春が深くなつてゐます。

影談 惜續 屬縣 試難 候順 與軒
斜肥 料箇 株熱 將込 理澄 佐觀
召導 騎源 怠皆 舞納 情胴 翼垂
確設 製係 折接 在婦 帥制 況靴 貫備
扱定 群屈 務果 閉杖 帥制 距荒 塔級
阪各 灣堀 産達 劇復 興有 要塔 級
免厚 銅釜 冷卒 職路 轉要 驗脈
輕應 反徑 違綴 題型 邊農

初等科國語五

目録

- | | |
|------------|-----------|
| 一 大八洲 | 十一 かんこ鳥 |
| 二 弟橋媛 | 十二 炭焼小屋 |
| 三 木曾の御料林 | 十三 ぼくの馬 |
| 四 戦地の父から | 十四 星の話 |
| 五 スレンバンの少女 | 十五 遠泳 |
| 六 晴れたる山 | 十六 海底を行く |
| 七 ことばと文字 | 十七 秋のおとづれ |
| 八 海の幸 | 十八 飛行機の整備 |
| 九 軍艦生活の朝 | 十九 動員 |
| 十 武士のおもかげ | 二十 三日月の影 |

附録 一 「あじあ」に乗りて 二 大地を開く

三 草原のオボ

一 大八洲

この國を 神生みたまひ、
この國を 神しろしめし、
この國を 神まもりませう。

島々 かず多ければ、
大いなる 島八つあれば、
國の名は 大八洲國。

巖として 東海にあり。
日の出づる 國にしあれば、
日の本と ほめたたへたり。

島なれば 山うるはしく、
島なれば 海めぐらせり、
山の幸 海幸多く。

海原に 敷島の國、
青山に こもる大和、
春秋の ながめつきせず。

と、だれかが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前にせま
つたと思ふと、山がのしかかつて来たやうな重さと、百雷
の一時に落ちたやうなとどろきとで、陸にぶつかつた。
人々は、われを忘れて後へとびのいた。雲のやうに山手へ
突進して来た水煙のほかは、一時何物も見えなかつた。
人々は、自分らの村の上を荒れくるつて通る、白い、恐
しい海を見た。二度三度、村の上を、海は進みまた退いた。
高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波
にめぐり取られてあとかたもなくなつた村を、ただあきれ
て見おろしてゐた。

稲むらの火は、風にあふられてまたもえあがり、夕やみに
包まれたあたりを明かるくした。始めてわれにかへつた
村人は、この火によつて救はれたのだと氣がつくと、ただ
だまつて、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

五 朝鮮のみな

秋

秋の空は、實に高い。さうして色が深い。紺青の太空中
は、晝の月がうつすらと出て、日は西へ傾きかけてゐる。
もろこしの葉を、かさかさ秋風がゆする。

秋の日をまともに受けた駐在所の庭で、一郎と貞童が遊
んでゐる。貞童が、萩のはうきでとんぼを追ひかけると、



とんぼはすいとそれて、豆畠の方へ飛ん
で行つてしまつた。
「とんぼ、とんぼ、
あつちへ行けば地獄、
こつちへ来れば極楽。」
貞童が歌ふと、一郎は、
「反對だ。きみ、とんぼを取るんだら
う。」

「うん、取るんだ。」
「では、こつちへ来れば地獄ぢやないか。」
「さういはないと取れないよ。」
二人は笑ひながら、豆畠の方へ走つて行く。豆が、かさか
さと音をたてる。

どの家も、オンドルをたきだしたと見えて、紫色の煙が
村中にただよつてゐる。その煙の中に、ばかりばかり、わ
ら屋根が浮いて見える。まだ西日を受けてゐる屋根に、干
してあるたうがらしが眞赤だ。高くのびたボブラヤ、茂つ
たアカシヤは、あざやかな黄色。櫻も紅葉して、みんな赤
い夕日を受けてゐる。

一郎と貞童は、とんぼ取りをやめて歸つて来た。
「生かしておかうや。」
貞童は、豆の葉の柄で作つた虫かごに、とんぼを入れた。

「動かないよ。」

二人は、じつととんぼを見てゐる。市場歸りの朝鮮馬が、
けたたましく鳴いて過ぎる。夕べの光をかすかに残した大
空を雁の群が渡つてゐる。

「雁、雁、わたれ。」

大きな雁はさきに、

小さな雁はあとに、

仲よくわたれ。」

一郎と貞童が、空に向かつて歌つた。

冬の夜

夜になつても薄青い空。その空に、星がいつばいこぼり
ついたやうにして、またたいてゐる。井戸端のうるしの木
が、ぬうつと立つてゐる。

ぼこん、ぼこんといふ音が通つて行く。水汲みに来た女
の頭の上の水がめが、ゆれて鳴る
音だ。寒さが骨身にしみて、し
んとする。

オンドル部屋の中では、薄暗い
ランプの火が、心細くゆれてゐ
る。おぢいさんが、孫を寝つかせ
ようとして話をしてゐる。
「この村に、古いけやきの木があ



るだらう。おばけが、あのけやきにゐた。」

「それがどうしたの。」

「そばを通る子どもに、いたづら
をした。」

「どうして、いたづらをしたの。」

「いたづらずきのおばけだから
さ。」

「どんないたづらをしたの。」

おぢいさんは、口をむにやむに

やさせて、なかなか答へない。ふくろふの鳴く聲が聞え
る。

別な部屋では、息子を相手に、父がかますを織つてゐ
る。

「これが五枚めだつたな。」

「はい、五枚めです。」

「どうだ、六枚織れるか。」

「織りませう、おとうさん。」

息子が元氣に答へる。話しながらも、二人の手が器用に動
く。そばでは、母が、娘を相手にきぬたを打つてゐる。

「これだけ、たたいてしまはう。」

母が棒を取つて、とんとひやうしを取つた。とんからとん
から、調子のよい音が流れ出した。



「これでは大水だな。」
張は、遠くを流れてゐる川の首に、耳をすました。
「たゞ、この川があふれたが最後、ここあたりは、海のやうになつてしまふ。島はもちろんのこと、家でも、土棚でも、樹木でも、願でも、みんな水びたしになつて、くづれてしまふのだ。」
「水には、かなはない。立ちのかう。」
張は、夜具をかつぎ、手に薬粉と塩をさげ、妻は、なべや、やくわんや、布きねなどを持った。二人の子どもは、茶わんや、紙や、油や、マツチを持った。
「もう、こんなところには来ないね。おとうさん。」
五風十雨、今年は、何とありがたい年であつたらう。粟も、大豆も、かうりやんも、これ以上賣のれないといふほど、ゆたかにみ

大水

ある年は、雨續きであつた。来る日も、来る日も、さんざん降つ雲がわいて來た。それが、みるみる近づいて來る。
雪ではなかつた。
「いなごだ、いなごの大群だ。」
「おうい、おうい。いなごだぞう。」
「いなごだぞう。」
農夫たちは、はらきを持つたり、たいまつを持つたりしたまま、うはのそらで、天を見てゐるばかりである。
いなかの群は、雨のやうに、ざあつと轟に降つた。作物は、ひとたまりもなく、むざんに食ひ荒されてしまつた。
明月
五風十雨、今年は、何とありがたい年であつたらう。粟も、大豆も、かうりやんも、これ以上賣のれないといふほど、ゆたかにみ



「おとうさん、どこかへ行きたい。」
二人の子どもは、かういつてせかんだ。けれど、張はだまつてゐた。
「おとうさん、御飯のあるところへ行きたい。」
「う。」
「」
「おかあさんも、いつしよに行きませうね。」
張は、突然大きな聲でどなった。
「どこへ行かうといふのだ。干ばしになつても、ここを離れることはできない。」
ある年は、雨續きであつた。来る日も、来る日も、さんざん降つ雲がわいて來た。それが、みるみる近づいて來る。
雪ではなかつた。
「いなごだ、いなごの大群だ。」
「おうい、おうい。いなごだぞう。」
「いなごだぞう。」
農夫たちは、はらきを持つたり、たいまつを持つたりしたまま、うはのそらで、天を見てゐるばかりである。
いなかの群は、雨のやうに、ざあつと轟に降つた。作物は、ひとたまりもなく、むざんに食ひ荒されてしまつた。
明月
五風十雨、今年は、何とありがたい年であつたらう。粟も、大豆も、かうりやんも、これ以上賣のれないといふほど、ゆたかにみ

倣 硯 筆 鉛 異 啓 射 致 察 郊 廓 幼
救 沒 非 速 紫 紅 織 緣 測 視 眼 殊
象 陰 慰 想 像 墨 研 究 費 周 陶 巧
萊 簪 健 康 態 臨 認 取 贖 宣 詔 言
禾 宗 靈 榮 基 滅 輸 示 好 容 易 編
緯 銳 掃 衰 避 歡 吉 縫 覽 因 翌 比
較 努 簡 旨 判 譽 聖 舉 閑 期 悔 存
墓 希 椿 漢 省 普 姓 塗 藏 熟 禁 單
乾 收 程 猛 驅 逐 艇 埋 庫 搖 醫 療
看 屈 交 境 智 湖 件 檢 髮 辭

皆そのあとを追つた。
「あつぱれ武士の手本。」といつてほめそやした。
檢使は、宗治の首を持ち歸つた。秀吉は、それを上座に

一 土ととも

今年、ひでりだ。張は、うらめしさうに天を仰いだ。もう、何厘雨とひをししか知れない。けれども、雨雲一つ浮かんで来なかつた。
「この村に、きつと不信心者がゐるんだ。」
「だれだ。」
「だれだ。」
農夫たちは、口々にそんなことをいつた。
畠の土が、ぼこぼこに乾ききつてゐる。黄色な土が、すつかり白くつぼくなつた。せと物のやうに固くなり、ひびがはいつた。
花をうけようとした葵が、そのまま枯れて、見えるかきりの葵畠は、しらかになつた。
たべる物が、だんだんなくなつて來る。大群にしまつておいた倉の物も、あと、いくらかなくなつてしまつた。
「張さん、何か思ひんでください。うちの子どもが、うゑてゐます。」
張は、自分の二人の息子のことと思ひ、倉には、ほとんど物のなほととも思つた。それでも、張は、倉から薬粉を出して來た。
「ありがたうございます。これで、子どもたちは、生き延びませう。」
井戸の水も、かれて來る。

附 録

つた。

今日は夜明けから、張の家では、麥刈をやつてゐた。いくら汗が流れても、楽しい汗であつた。いくら、腰や腕がつかれても、こころよいつかれであつた。

「これで、もう大丈夫。こんどこそ安心。」
長い麥のうねを刈りあげるたびに、こ
んなひとりごとをいつた。子どもたちと
の約束が、果せると思つただけでも、張
はうれしくてならなかつた。

仲秋明月の夕暮である。

畠から大きな月が出て来た。

庭へ出した机の上に、梨やぶどうを供へた。

紅をつけたお菓子もかざつた。

らふそくには、火がともつた。風の無い静かな月の出である。

二人の子どもは、笛を合はせて吹いてゐる。

張は、しみじみと幸福にひたつた。

二 愛路少年隊

交通路は、ちやうど、人間でいへば血管のやうなものである。もし、血管に少しでもさしはかりがあれば、からだの働きも望めないやうに、交通路に故障が起れば、國の活動は、たちまちとどこほることになる。殊に支那のやうに、廣くて大きな國では、交通路が何よりも大切である。



交通路には、鐵道があり、自動車道路があり、水路があつて、北支那だけでも、これらの延長は、約二萬六千

キロにもなるといはれる。更に、中支那・南支那のものを合はせたら、實におびただしい數字にのぼるであらう。

この長い長い交通路を、りつぱに整へ、安全に保つことができないうちは、支那の活動も、發達も望めない。北支那に愛路村といふ地域が設けられたわけも、ここにある。

愛路村といふのは、交通路を愛し、これを守る村のことで、道の兩側のおの十キロ以内のところを、これに當ててゐる。愛路村に住んでゐる青年は、愛路青年隊を組織し、女子は婦女隊を組織し、少年たちは、愛路少年隊を組織してゐるのである。

愛路少年隊には、十一歳から十七歳までの少年がゐて、みんな元氣のよい顔に、國防色の制服を着て、櫓の棒をかつぎながら堂々と行進する。かうした訓練を受けたのち、少年たちは、それぞれの任務を帯びて、受持の場所につく。

あれほど廣い支那のことであるから、今でも日本の眞意がわからないで、いつ心得違ひのらんばう者が、現れないともかぎらないからである。

愛路少年隊には、次のやうな美談がある。

ある少年が、鐵道のはれてゐるのを見つけた。急いで本隊に報告しようと思つて走つて行くと、向かふから列車が進んで来る。こ

のままにしておけば、列車は、ひつくりかへるばかりだ。少年は、線路の上に二王立ちになり、持ち合はせてゐた布を振つて、やつと列車を少年の寸前で止めた。

ある少年は、自動車道路の見張りを受け持つてゐたが、急病で寢込んでしまつた。といつて、その任務は、しばらくも捨てておくことができない。

そこで、少年の老父が、これに代つて見張りに出かけた。折悪しくあらしになつて来た。

がけを曲らうとした時、烈しい風が吹いて来て、父親を深い谷あひに落してしまつた。かうして、父親は、少年の身代りとなつた。

楊といふ少年がゐた。ある夜、これも鐵道線路がこはされてゐるのを發見し、地だんだふんでくやしがつた。かれは、すぐその惡者がどこから来たか、どこへ逃げて行つたか、何名来たか、それらを調べ始めた。惡者といつても、村の良民と違つた着物を着てゐるわけでもなければ、ことが變つてゐるわけでもない。これをさがし出すのは、非常に困難であり、みんなは、何の手がかりもないこの調査を、打ち切らうといひ出した。楊少年は、「自分の村に起つたことだ。どうしてもさがし出さなければならぬ。」といつて、止めなかつた。

ある日の夕方、かれは村の墓地を通つてゐた。すると、そこにかくれてゐたあやしい者が、三人現れた。楊少年は、つきりこれだと思つた。急いで報告しようと思つた。いつさんに走り出した。すると、三人もあとを追ひかけた。追ひつけないと思つた一人が、い



三 胡同風景

「惡者が三人、あの墓地に——」
と叫ぶやうにいつた。さうして、またすやすやと眠りだした。まもなく、楊少年は、また何はいはうとして口を動かしてゐる。耳を寄せて聞くと、
「ニッポン、パンザイ。」
といつてゐる。それつきり、少年の息は絶えてしまつた。

北京の町には、胡同が網の目のやうに通じてゐる。胡同といふのは、小路のことである。
どこの家も、高い土塼を立てめぐらしてゐるので、小路は、おのづから高い土塼にきになつてゐる。あまり道幅もない兩側の土塼の上から、ふんじゆの枝や、

く。正月には、門の戸びらに、眞赤な紙にめでたい文字を書いた春聯が張りつけられる。子どもたちは、その新鮮なかざりに正月気分を味はふ。

春になると、鳩笛が天から響いて来て、胡同をにぎははせる。鳩笛といふのは、鳩に笛を結びつけて飛ばすのである。飛ぶと、風を受けてその笛が鳴る。笛には大小があるから、鳩が群になつて飛んで来ると、笛の音がいろいろに鳴つて、それこそ天上の音楽である。中庭のあんずが咲いて、花びらが胡同へちらちらと降つて来るのも、このところである。

楊のわたが、どこからともなくたくさん舞つて来る。小さな光つたわたが、土塀の片すみにたまる。ふはふはとまろくなつて、風が吹いて来ると、ところどころがり出す。子どもたちは、それをつかまうとして追ひかける。

大通を、豚がぞろぞろと歩いて行く。その鳴き聲が胡同に響いて来る。

あひるが、「があがあ。」とさわいで行く。

花嫁行列のラッパの音が、どこかで響く。子どもたちは、またそちらの方へ走つて行く。

胡同は、子どもたちを育ててくれる母のふところのやうなものである。子どもたちは、この中で自然の美しさにひたり、人情の温かさを吸つて、おぼろかにのびて行く。

初等科國語 七

目 録

一	黒龍江の解氷	十二	山の朝
二	永久王	十三	燕岳に登る
三	御旗の影	十四	北千島の漁場
四	敬語の使ひ方	十五	われは海の子
五	見わたせば	十六	月光の曲
六	源氏物語	十七	いけ花
七	姉	十八	ゆかしい心
八	日本海海戦	十九	朝顔に
九	鎮西八郎爲朝	二十	古事記
十	晴れ間	二十一	御民われ
十一	雲のさまざま		

附 録

一	ジャワ風景	二	ビスマルク諸島
三	セレベスのみなか	四	サラワクの印象

一 黒龍江の解氷

五尺もある厚い氷、
遠い兩岸の間をぎつしりと張りつめてゐた氷、
その下で、眠つてゐた黒龍江が、
ひとつ大きなあくびをしてから、
春のいぶきをいつばいに吸ひ込んだ。

めりめりと氷が割れる、
碎ける、

地響きをたてながら。
半年も地面のやうに動かなかつた川が、
今、動きだした。
あちら、こちらに川波が光りだした。
ああ、自然の大きな脈搏。

松花江をのみ、
ウスリー江をのみ、
はるかオホーツクの海へ向かつて、
「はあ。」と冬のなごりを吐く。
暗黒色の流れにあふられ、

氷塊と氷塊がつきあたり、
噛みあひ、のしかかり、
でんぐりかへり、
群がつて流れる。

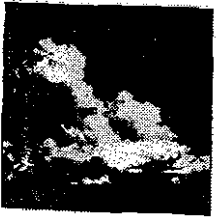
やがて黒龍江は、やさしい手をひろげ、
わが子のやうに満洲をだきかかへて、
春の歌を歌ふ。

二 永久王



陸軍幼年學校の制服をお召し
になつた北白川宮永久王は、母
宮殿下の御前にお立ちになつ
た。

「ただ今、北海道から歸つてま
ゐりました。これは、おみやげにと思ひまして、求めて
まゐつた黒竹の杖でございます。」
王は、お持ち歸りになつた杖を、母宮殿下におあげになつ
た。それをお受け取りになつた母宮殿下は、
「この杖をかうして持つてゐると、永久に手を引かれてゐ
るやうです。」



のも、この入道雲です。積雲は二千メートル以下の高さですが、入道雲の頂になると、六千メートルから八千メートルの高さになります。その頂が開いたのは、朝顔雲とか、かなと云とかいつて、雷雨を起したり、時にひやうを降したりします。一天にはかに墨を流したやうに曇つて、天地も暗くなるのは、かうしたすばらしく厚い雲によつて、日光がさへぎられるからです。巻雲のかげそい女性的な美しさに比べると、積雲や、入道雲や、かなと云は、いかにも壯大で、強烈で、男性的です。

十二 山の朝

ふと、目がさめる。

遠くの方から、小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて来る。まだ、なかなば眼りからさめない心のうちに、山の夜明けだといふことが浮かぶ。

はね起きて窓を開いた。つめたい空氣が、吸ひつけられるやうに室の中へしのびこむ。首筋に水晶のはげがさはつたやうなつめたさである。まだ、朝の太陽はのぼつてゐない。薄明の天地の中で、山々の薄黒い姿が、だまつて眠つ

てゐる。

山小屋の重い戸びらを音もなく開き、素足に草履をはいて、露深い草の小道におり立つ。生き生きとした小鳥の聲が、あたりの静けさをふるはせて、頭の上から降り注いで来る。このにぎやかな聲の絶え間を縫つて、どこからともなく、つつましかな小川のせせらぎの音が、かすかに聞えて来る。

山からわき流れる清水が、かけひをまつしぐらにかけ抜けて通る。玉のやうな、清らかな水を両手にすくひあげると、こぼりつくやうなつめたさが全身にしみとほる。この水で口をすすぎ顔を洗ふと、心の底までが清められるやうな氣持がする。胸を張つて、思ひきり深く朝の山の空氣を吸ふ。

山小屋の前の小道をくだつて行くと、そよ風が頬にこちよい。なら・かへで・ぶな・くりなどの木々が茂り合つて、頭の上を自然の天蓋でかざつてくれる。夜明けに近い薄あかりが、重なり合つた葉の層を通して落ちて来る。緑色のガラスを張りめぐらした部屋の中に、たたずんでゐるやうである。一々の鳴き聲を聞きわけることができないやうに、鳥の聲がにぎやかに聞へて来る。短い鋭さの中にもどこかやさしさのある小鳥の聲に混つて、太く口の中でふくんだやうに鳴く山鳩の聲が聞えて来る。その間を際立つ

てくつきりと、うぐひすの聲がころがるやうに續いて走

る。この美しい木々の緑と、さわやかな鳥の聲のどちをうを前にして、しんせつな山のお招きの席に、しばらくは、すべてを忘れて立つてゐた。

林の中を、奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、小川のせせらぎはだんだん高く聞えて来る。林を出はづれて、頭の上の緑のおほひが盡きてしまつた時、いつのまにのぼつたのか、朝の日の光が、石を囓んで流れる水の上をどつてゐる。

危ふげにかけ渡された一本の丸木橋の上を、靜かに渡る。この丸木橋に立つて、朝の太陽の前に身じまひを正し始めた高い山々の針葉樹林を見あげる。きりのやうにとがった梢の先を天に向けて眞直に立つものは、かうやまきである。ふさふさした枝の冠をいただいて立つてゐるのは、檜である。

この深山の朝の靈氣にふれるため、私はここまでのぼつて來たのだ。

十三 燕岳に登る

「出發。」

山田先生の聲が、中房温泉旅館の庭に勇ましく響き渡つた。午前七時である。きうふの雨はからりと晴れて、太陽

は、ほがらかにこの温泉の谷間を照らしてゐる。

ルックサック・木筒・金剛杖の身支度もかひがひしく、ぼくらは、小鳥のやうにをどる胸を押さへながら、つり橋を渡つた。ごうごうと鳴る激流の上に、高い橋がぐらぐら動くのが、愉快でたまらなかつた。

道はすぐ登りになる。かちりかちりと、杖が岩に鳴つた。前の人の足あとをふみしめるやうに、一步一步登つて行く。せまい道の兩側には、大きなさが、ぼくらの頭をおほふくらみ高く茂つてゐた。

岩角が出、木の根が横たはつてゐる。

「氣をつけろよ。」

と、前の方で聲がする。額も、せなかも、汗ばんで來た。はずむ呼吸が、前にも後にもはつきり聞かれる。

かうして、つづら折りの明かるい山道を、あへぎあへぎ登つた。時々見おろす谷底に、さつき出發した温泉宿が、だんだん小さくなつて行く。谷川が、下で遠く鳴つてゐる。つい向かふに、ぐつと見あげるほどそびえ立つてゐるのが、有明山である。

「今日は、あの山よりもつと高く登るのだぞ。」

と、石川先生がいはれた。

まばらな潤葉樹林を通して、太陽がじりじりと照りつけ。帽子の下からわき出る汗が、顔を傳つて流れ落ちる。

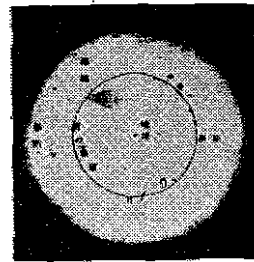
「私の今の身の上を悲しんで泣いてゐるのではありません。あなたがたが、私に示されたしんせつと、あなたがた同志の友情のうらはしさに、しみじみ感じて泣いてゐるのです。かうした温かい心は、アメリカの軍隊には決してありません。私は、日本の軍隊がつくづくうらやましくてならないのです。」
 といつて、二人の衛生兵の手を、自由のきかない兩方の手で、強く握つた。

十七 太陽

私たち人類にとつて、否、すべての生物にとつて、太陽ほどありがたいものがあるだらうか。

太陽は、私たちに絶えず熱と光を送つてよこす。地上のあらゆる生物は、この熱、この光のおかげで生きてゐるのである。月は死の世界であるといふことを、私たちはすでに知つた。太陽こそは、あらゆる生命の源泉なのである。

あらゆる生命の源泉であるだけに、それはまた實に偉大な存在である。直徑凡そ百四十萬キロもある一大火球だといふ。もちろん、かういつただけでは、



ほとんど見當がつかない。月は、地球を中心として、ぐるぐる廻つてゐる。今、かりにそのまゝそつくり移して、地球を太陽の中心に置くとしても、月は太陽の内部を廻るだけである。地球と月との距離が、今の約二倍なくては、月が太陽の表面を廻るわけにはいかない。また、月を直徑三センチのビンボンの球、地球を十二センチのゴムまりとしてみても、太陽は直徑十三メートルといふ大きなものになつて、ちよつと手近にたとへるものが見つからない。
 この大きな太陽が、私たちの住む地球から見ると、だいたい月と同じ大きさに見えるのは、いふまでもなく、太陽が月より非常に遠いところにあるからである。地球から太陽への距離は、凡そ一億五千萬キロで、月への距離の約四百倍に當る。一時間四百キロの速さで飛ぶ飛行機に乗つて行くとしても、ざつと四十二年かかるわけである。
 これほど遠いところにありながら、太陽は、私たちに十分な熱と光を送つてくれる。夏の日の暑さから考へてもわからぬやうに、太陽から出る熱量は、すばらしいものである。太陽そのものの温度は、表面で約六千度、内部はもつともつと高熱である。
 光の強さに至つては、ほとんど普通のことばでいひあらはすことができない。これを燭光であらはすと、その数は、三の次に零を二十七つけたものになる。

濃い色がガラス、または黒くいぶしたガラスを通して太陽を見ると、表面に黒いごま粒のやうなものが見えることがある。それが太陽の黒點と呼ばれるもので、見たところごま粒のやうだが、實は地球より大きいのがあり、時には地球の十數倍もあるのが現れることがある。黒點は、太陽の表面に起る大きなつむじ風だといはれ、その數や大きさは、凡そ十一年を週期として増減してゐる。

太陽のやうな天體は、ただ一つあるだけであらうか。かりに、太陽をもつともつと遠いところで見るとすれば、結局は、あの、夜の空に銀の砂子をまいたと見える小さな星と、同じものになつてしまふであらう。つまり太陽は、夜の空に無數に輝く星の一つなのであるが、われわれに近いために、特に大きく、明かるく見えるに過ぎない。廣い廣い宇宙には、太陽と同じやうな天體が、ほとんど數へ切れないほど存在する。さうして、その中には、太陽より小さいもの、太陽とほぼ同じ大きさのものもあるが、また太陽の數百倍といふすばらしいものがあるのである。

十八 梅が香

梅が香にのつと日の出る山路かな
 山路來て何やらゆかしすみれ草

芭蕉

古池やかはづとびこむ水の音

芭蕉

春の海ひねもすのたりのたりかな
 春雨にぬれつつ屋根の手まりかな
 菜の花や月は東に日は西に
 富士ひとつづみ残して若葉かな

十九 雪國の春

黒い土

濃い靑空には、春の國から生まれて來たかと思はれる白雲が、山の懷からぼつかり顔を出しては、見るまに大きくふくらんで、輕さうに浮いて行く。

やはらかな日ざしが、窓いつぱいに降りそそぐ。縁先の雪が、かさりかさりと、音をたてて崩れる。崩れた雪は、やがて雨落ちのみぞに解け込んで、銀の糸のやうにまぶして輝きながら、ちよろちよろと流れて行く。

風はまだうら寒い。けれども、家々の窓も障子も、いつせいにあけはなされて、どこからか、カナリヤのさへづりが朗かに聞えて來る。

庭におり立つた私は、荒なはで枝をつつた松の根もとに、そつと顔を出してゐる黒い土を見つけた。もう、じつとしてはゐられない。私は、その土をしつかりと握つてみた。

殺 刈 敷 置 飼 束 招 氏 去 參 繪 姉
 豐 惠 似 積 歸 后 忠 義 陽 散 害 藥
 除 增 種 類 旅 勵 港 由 機 械 員 關
 器 雷 常 會 寫 眞 攻 說 汁 園 材 映
 畫 幕 階 臺 萬 賢 穴 不 歲 役 團 仕 事
 傳 改 望 捨 授 古 卷 廷 柱 警 防 角 演 粉
 燒 貓 築 投 尊 袋 飯 品 圖 堅 團 粉
 郷 味 策 擊 必 倒 腕 肩 勉 的 身 習
 王 射 放 溫 鉢 僧 經 堂 腕 解 點 條 網
 張 突 班 成 無 秒 爆 移 染 傾 威 京
 貨 驛 建 詩 清 社 紋 公 博 館 技 奏
 局

初等科國語 三

一	朝の海へ	十三	錦の御旗
二	潮干狩	十四	國旗掲揚臺
三	日本武尊	十五	夏
四	君が代少年	十六	兵營だより
五	靖國神社	十七	油蟬の一生
六	光明皇后	十八	とびこみ臺
七	苗代どころ	十九	母馬子馬
八	地鎮祭	二十	東郷元帥
九	笛の名人	二十一	くものす
十	機械	二十二	夕日
十一	出航	二十三	秋の空
十二	千早城	二十四	濱田彌兵衛

一 朝の海へ

朝の潮風あびながら、
 弟と二人、海べをかける。
 しめつた砂をけりながら、
 波うちぎはを、どんだんかける。

明かるい海だ、どこまでも。

地平線は銀色で、

空と海とがとけあつて、

明かるい海だ、どこまでも。

ぼくらは石を投げてみた、

「一二の三。」で投げてみた。

弟の石が海に落ち、

つづいてぼくのが海に落ち。

かもめが五六羽とんで来て、
 波にゆられて浮かんでる。
 水にもぐつてひよいと出て、
 ひよいと浮かんでまたもぐる。

風に向かつてぼくたちは、
 両手をあげて息を吸ふ。
 朝の海べはもう春で、
 みんな楽しい、新しい。

二 潮干狩

海岸は、一面に潮が引いてゐて、もう大勢の人たちが、
 潮干狩をしてゐました。

先生は、私たち四年生の人員をお調べになつてから、次
 のやうにおつしやいました。

「これから潮干狩をするのですが、いつものやうに、四人
 づつ一組になつて、仲よく貝をお取りなさい。さうし
 て、海には、どんな生きものがゐるかを、よく氣をつ
 てるやうになさい。」

勇さんと、正勇さんと、花子さんと、私と、四人が一組
 になつて、ほり始めました。小さな熊手くまてで砂をかくと、か
 ちりとさはるものがあります。三センチぐらいのあさりで
 した。あきりは、こんな浅いところに、もぐつてゐるのか
 など思ひながら、むちゆうになつてほつて行きました。お
 もしろいほど、たくさん出て來ました。

ほつたあとに水がしみ出て、まはりの砂が、少しづつく
 づれて行くので、手ですくつて、かい出しました。すると、